

C II 部

日本語慣用構造

C II 部では表現的に慣用化された「接続」と「挨拶」の構造について考える。

「接続」を表す「接続詞」「接続助詞」と呼ばれる形式群は「接続」のために慣用化された基群である。意味と構造の両面から把握する必要があるので、両者をC 6 章とC 7 章に分けて考察する。

「挨拶」は人間関係維持のために表現が慣用化された形式群である。省略等が進んでいることが多いが、日本語である以上、日本語の原理に従って構造が構築され、表層化が行われている。このことを確認する。それとともに、構造伝達文法の提示する構造とはどんなものであるのかを理解する助けとする。

C6章では、文の「接続」を意味の面から考察する。順接・逆接の意味関係を捉るために「理流、論流」という概念を設定して理論化する。

C7章では、文の「接続」を構造の面から考察し、個々の具体的な詞について構造モデルを用いて論じつつ、接続詞・接続助詞の持つ接続力が論流認識力と格結合力と連合力(連用形)であることを明らかにする。

C8章では、親しみのある各種の「挨拶」について構造を立体モデルで示して真の意味を明らかにし、併せて構造そのものに対する理解を進める。

C 6 章

接続の構造(1) (理流, 論流)

C6. 0 順接・逆接をどう捉えるか

2つの文の接続という現象を意味の面から捉えようとするとき、まず順接・逆接の捉え方の理論的根拠を明らかにする必要がある。そこで「理流・論流」という概念を設定して「接続」を理論化する。同時にこれを図示する。

C6. 1 「接続」を意味の面で捉える

「接続」を意味の面で捉えるために「理流 1・理流 2」を設定し、両者間に「論流」が発生するものとする。

C6. 2 前件構造と後件構造……2つの構造、2つの文

2つの構造が描写され、2つの文、前件文と後件文になる。

C6. 3 構造上の接続

構造上では接続とは「格結合・連合・独立構造併置」により一体化した、あるいは関連づけられた構造群となることをいう。詳細は次章、C 7 章で扱う。

C6. 4 意味上の接続

意味上の接続を理論化するために「理流・論流」を設定する。論流を早めに伝えるために発話者は接続基を使用することがある。

C6. 5 理流、論流のモデル化

モデル化して順接・逆接・話題転換の意味関係を可視化する。

C6. 6 単なる格関係・単なる連合関係と「接続」の違い

理流 1 と理流 2 に論流が生じなければ、そこにあるのは単なる格関係か単なる結合関係である。

C6.1 「接続」を意味の面で捉える

国語文法に「…のに／…て／…ながら」のような「接続助詞」と呼ばれるものと、「しかし／そして／すると」のような「接続詞」と呼ばれるものがある。本文法ではこれらを「接続」の機能を持つようになった慣用形式であると捉え、「接続基」と呼ぶことにしている。本章ではこれらの接続基が表している「接続」そのものについて、特に意味の側面から検討してみたい。

一般に、前後に並ぶ2つの文があれば、その間には自然に(無関係という関係を含め)何らかの関係が生じる。ここには人間の関係認識力が働いており、意味上の接続が生じている。また、話者はその関係を明示するために接続基を使用することがある。その接続基は、関係認識力のみに頼る場合を含めて、10種類のものを考えることができる(次章表C7-1)。この一つひとつの接続基の構造についてはC 7章で検討する。

「接続」をどう認識し、どう表現するかは「話者」の表現意思に関わっている。「聞き手」は発話された文形式を手がかりに、接続を解釈する。

本章では、接続の意味的関係をモデル化するのに「理流1」「理流2」と「論流」という概念を使用する。接続基が形成されるのは意味的に「論流」を伴う場合であり、「論流」が伴わなければ、構造的にはそこに存在するのは単なる格結合ないし単なる連合である(表C6-1)。

接続基存在の条件……論流の存在

表C6-1

	接続基1～接続基10	単なる格結合、連合
意味上	理流1、理流2間に論流あり	理流1、理流2間に論流なし

なお、「論流」の存在・非存在についての考察は本章の提示で完成しているわけではない。今後さらに検討を進めたい。

本章では「接続」を「意味上の接続」から考えることになるので、「構造上の接続」についてはC 7章で扱うことになる。

なお、文と文ではなく、実体と実体(名詞と名詞)の「接続」(例:「書籍と文具」)については、当文法では「列挙」という別の概念のものとして扱っており、本書のC 3章で論じている(『文法』表5-6, 『発展A』A1.3 ④ 参照)。

06.2 前件構造と後件構造……2つの構造, 2つの文

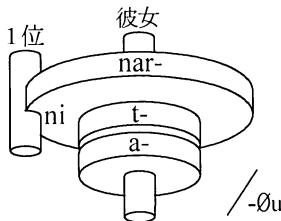
ここに構造Xと構造Yがある。

[構造X] 彼女が1位になった。

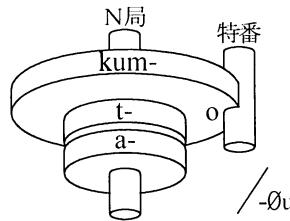
[構造Y] N局が特番を組んだ。

構造図は図C6-1と図C6-2である。

[構造X]



[構造Y]



図C6-1 彼女が1位になった。

図C6-2 N局が特番を組んだ。

この2つの構造が描写され発話されて2つの文となるが、その際に、まず [構造X] が描写・発話され、次に [構造Y] が描写・発話されるものとする。このとき、構造Xを「前件構造」、構造Yを「後件構造」と呼ぶ。また、この構造が描写されて文となったときは、構造Xの描写文を「前件文」、構造Yの描写文を「後件文」と呼ぶ。構造Xの表す内容を「前件」と呼び、構造Yの表す内容を「後件」と呼ぶ。以上をまとめて表にすれば、表C6-2のようになる。

前件と後件

表C6-2

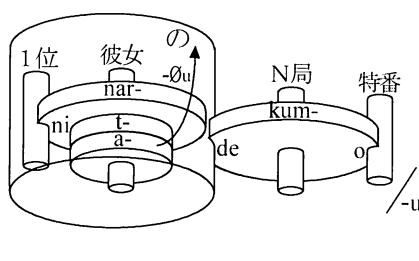
構 造	構造として	文として	内容として
[X] 彼女が1位になった	前件構造	前件文	前 件
[Y] N局が特番を組んだ	後件構造	後件文	後 件

06.3 構造上の接続

「構造上の接続」とは前件構造(または「それ」等の代置要素)と後件構造が「格結合」「連合」(両者ともA17章参照)、あるいは「独立構造並置」によって一体化、あるいは関連づけられた構造群となることをいう(図C6-3、図C6-4)。「格結合」「連合」は、意味上の「論流」(C6.4 参照)を伴わなければ単なる

格結合、単なる連合であり、接続基の形成には至らない。

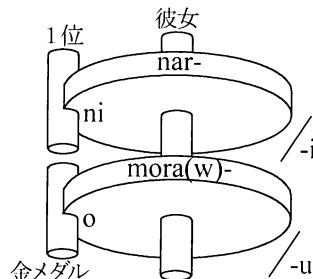
この構造上の接続に関しては C7章において詳しく扱う。



彼女が1位になったの-de

N局が特番を組む。

図C6-3 格結合による接続



1位に nar-i 金メダルをもらおう。

図C6-4 連合による接続

C6.4 意味上の接続

すべて文章中のある文とその前後の文とは、論理的に無関係という関係を含めて、何らかの論理関係にある。意味上の接続とは前件文と後件文が文脈的な論理関係を持つことをいう。本章では接続の論理関係をモデル表示するために「文脈的な論理関係」を a) 「理の流れ」と、 b) 「論の流れ」で構成されているものとして考えることにする。

a) 理の流れ……「理流」……常識的認識

「理の流れ」とは、その言語使用者一般(認識共同体所属者)に共有される共通理解から導かれる、前件・後件から発する認識であり、その共同体における常識的認識である。たとえば、

C6-1> 明日の朝は早い。

という前件文があれば、日本語使用者の共通理解から暗黙のうちに「明日の朝は早く起きる必要がある」「今夜は早く寝たほうがいい」「何かふだんと違うようだ」というたぐいの常識的認識、「理の流れ」が生じる。

「理の流れ」は認識共同体での常識的認識なので、認識共同体が異なれば異なることがある。たとえば、東京では

C6-2> エスカレーターの空いている片側を駆け上った。

という前件文からは「右側を駆け上った」という理の流れを生じるが、大阪では「左側を駆け上った」という対照的な理の流れを生じる。

C6-3> エスカレーターが長いから、空いている側を駆け上って行った
んだけど、右側にも人が立っていて、途中で止まっちゃった。

という文は東京での出来事を述べたものと思われる。

また、同一認識共同体、あるいは同一個人の中においても相反する「理の流れ」を生じることがある。たとえば

C6-4> 彼は若い。

という前件文からは「彼は何もできない」という理の流れ(常識的認識)と「彼は何でもできる」という対照的な理の流れ(常識的認識)が生じうる。

C6-5> 彼は若い。(だから、何もできない。)

C6-6> 彼は若い。(だから、何でもできる。)

「若さ」の持つ2つの要素「未熟さ」「可能性」のどちらの要素から理を導くかによってこの違いが生じる。

以上のように、文があれば「理の流れ」を生じるが、これを「理流」ということにする。

b) 論の流れ……「論流」……2 理流間の関係

「理流」は後件文からも生じる。たとえば、

C6-7> 明日の朝は早い。

という前件文に対し、

C6-8> 今夜は早めに寝られない。

という後件文があれば、この後件文からも「今夜は仕事が多いようだ」「明日は早く起きるのはつらいはずだ」というような理流が生じる。

前件文から生じる理流を「理流1」とし、後件文から生じる理流を「理流2」とする。いま、ある話者が次のような発話を行ったものとする。

C6-9> 明日の朝は早い。 今夜は早めに寝られない。
(→理流1) (→理流2)

このような例の場合、話者はここに生じる理流1と理流2の関係に意味的なズレを認識する傾向にあり、一種の矛盾を認識する。

また、仮に、後件を次のように変えて発話を行ったものとする。

- C6-10> 明日の朝は早い。今夜は早めに寝る。
 (→理流1) (→理流2)

すると、理流2は「明日のことを考えている」「明日の朝は早く起きられる」などとなり、話者は理流1と理流2の意味の関係が調和していると認識する傾向にある。

ここに、理流1と理流2の間に矛盾や調和の認識が発生したことになる。この2理流間に発生する矛盾や調和等の認識を「論の流れ」「論流」ということにする。

理流1と理流2が調和していると話者によって認識される場合には「論流」は「順接」として意識され、矛盾していると認識される場合には「逆接」として意識される。理流1と理流2が無関係として認識される場合には「話題転換」として意識される。

- C6-11> 明日の朝は早い。今夜は早めに寝る。

という前件文、後件文の関係では話者は論流として「順接」を意識しており、

- C6-12> 明日の朝は早い。今夜は早めに寝られない。

という前件文、後件文の関係では「逆接」としての論流を意識している。

- C6-13> 明日の朝は早い。隣の店のホームページが更新された。

という前件文、後件文の関係では「話題転換」としての論流を意識している。

話し手は前件文発話以前から論流を意識している場合が多いが、聞き手にとっては、論流が意識できるのは後件文の意味が判明した後であるということになる。しかし、もし話者が次の例のように、論流を明示する表層形式（接続基）を使用すれば、聞き手は後件が始まる前に論流を把握することができる。

- C6-14> 明日の朝は早いから、今夜は早めに寝る。〔順接〕

- C6-15> 明日の朝は早い。だから、今夜は早めに寝る。〔順接〕

- C6-16> 明日の朝は早いが、今夜は早めに寝られない。〔逆接〕

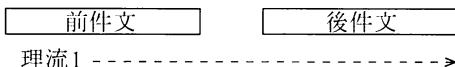
- C6-17> 明日の朝は早い。しかし、今夜は早めに寝られない。〔逆接〕

- C6-18> 明日の朝は早い。ところで、昨日桜が開花した。〔話題転換〕

以上のように、理流1と理流2の関係から生ずる調和や矛盾、無関係等の認識を「論流」と呼ぶことにする。

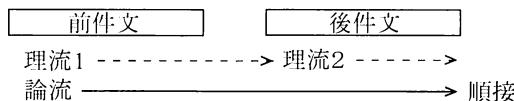
C6.5 理流, 論流のモデル化

前件文から理流1が、後件文から理流2が生ずる。図示においては、いずれも点線で示すことにする。理流1は、当該言語使用者一般(認識共同体)に共有されていると考えられる常識的(因果の)認識であり、これを比喩的に「直進する」流れで表すこととする(図C6-5)。理流2は異なる表示法になる(図C6-6, -7, -8)。



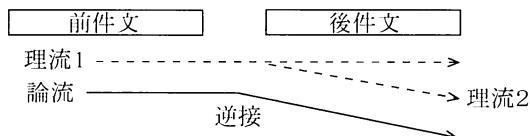
図C6-5 理流1

理流1と理流2が調和していると認識できる場合には、理流1の延長上に理流2が存在するものとして捉え、論流を直進する流れとして図示する。このとき論流は順接として意識される。論流は実線で表示する。



図C6-6 論流 [順接]

理流1と理流2が矛盾していると認識される場合には、理流2は理流1の延長から外れて存在するものとして捉え、論流を直進から外れた流れとして図示する。論流は逆接として意識される。

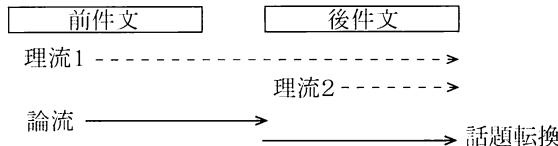


図C6-7 論流 [逆接]

「逆接」といっても、論流がUターンして「逆方向」に進む(戻る)わけでは

ない。理流 2 が理流 1 に調和しないだけである。ここでは「逆」は「従わないこと」を意味している。

理流 1 と理流 2 に論理的関係が認識できない場合には、話題が転換されたものと意識される。



図C6-8 論流 [話題転換]

以上に設定した理流・論流のモデルは、順接・逆接・話題転換の 3 種である。その他の接続関係はこの 3 種のいずれかに準ずるものであると考えられる。すなわち、累加(そのうえ)・並立(あわせて)・説明(つまり)は順接のモデルに準ずるもの、選択(それとも)・補説(ただし)は逆接のモデルに準ずるものである可能性がある。今後検討を続ける必要がある。

C6.6 単なる格関係・単なる連合関係と「接続」の違い

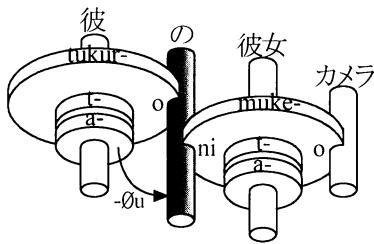
たとえば「のに」という形式には 2 種類のものがある。文間に「接続」があるかどうか、つまり論流を生じさせるかどうかという相違に基づく 2 種類である。

次の 2 例では、話者は論流を意識していない。

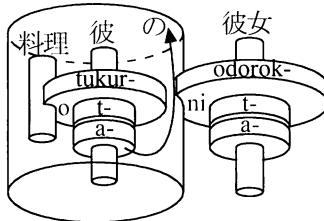
C6-19> 彼女は、彼が作ったのにカメラを向けた。(図C6- 9)

C6-20> 彼女は、彼が料理を作ったのに驚いた。 (図C6-10)

この 2 例の「のに」は、実体の「の」、包含実体の「の」が属性（「カメラを向けた」「驚いた」）と密接に関係のある「に」の格で関係している。C6-19> では「に」は方向を示す格であり、C6-20> では「に」は原因を示す格として機能している。



図C6-9 彼が作ったにカメラを向けた
このような場合の



図C6-10 彼が料理を作ったに驚いた

理流1 (彼が作った／彼が料理を作った)

理流2 (カメラを向けた／驚いた)

は論流(矛盾や調和の意識)を生じさせない。前件文から生じた理流1を理流2が補って、全体で一つの文が形成される。理流2に当たるものは理流1と協同して全体でより大きな1つの理流〔協同理流〕を形成することになる。すると前件文に相当する部分は疑似前件文であることになり、後件文に相当する部分は疑似後件文であることになる。それで、この文の関係は次のようなモデルで表すことになる。

疑似前件文 | 疑似後件文 | (一文)

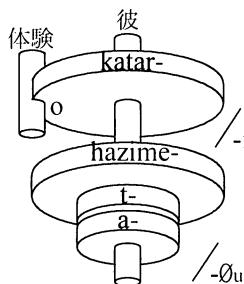
理流1 -----> (理流2) ----->

図C6-11 非接続：理流2が理流1の一部となる [協同理流]

また、次の「始めた」のような補助的動詞の使用される場合にも疑似前件文と疑似後件文が出現する。

C6-21> 彼は体験を語り 始めた。 (図C6-12)
(疑似前件文) (疑似後件文)

ここでは疑似後件文によってアスペクト(局面指示)が付加されただけであつて、論流を生じていない。つまり、ここにある「語り始める katar-i=hazime-」は単なる連合であり、協同理流を形成している。

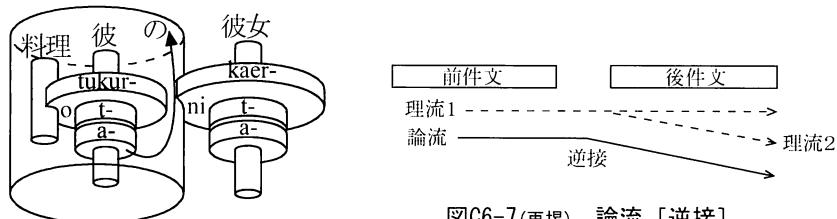


図C6-12 彼は体験を語り始めた（単なる連合）

一方、同じ「のに」でも、次の例では論流を生じる。

C6-22> 彼が料理を作ったのに、彼女は帰った。 (図C6-13)

この場合、包含実体の「の」は属性「帰った」と「に」格で密接に関係しているわけではなく、「に」格は単に「発生状況」を表しているにすぎない。このような場合に理流が分化し、「論の流れ」(矛盾の認識・逆接)が生じることになる(図C6-7(再掲))。



図C6-7(再掲) 論流 [逆接]

図C6-13 彼が料理を作ったのに、彼女は帰った

つまり、ここには接続基としての「のに基」が形成されている。

以上、「のに」を例として見たように、文間に論流が存在する場合と存在しない場合が（また、両方の可能性のある場合も）ある。論流の存在する場合には接続関係があるものと考えることにし、論流の存在しない場合には接続関係がないものと考えることにする。

接続関係のない場合(論流の存在しない場合)には、単なる格関係、単なる連合関係が存在するのみである。

C 7 章

接続の構造(2) (接続力)

C7.0 構造間の論理関係を表す構造形式……接続基 1～接続基10

日本語の文と文の接続は、「接続助詞」や「接続詞」を用いることなどによって行われる。いったい、そのときにはどんな力が働いて接続が可能となつているのだろうか。この章では接続を実現する力について考えてみたい。

C7.1 [接続基 1] 独立構造並置 1 ……前件構造属性の基本描写

C7.2 [接続基 2] 独立構造並置 2 ……前件構造属性の連続描写

2つの独立構造(文)が並置されるだけで、接続関係の種類について明示する形式はない。基 1 は -(r)u で、基 2 は -(i) で接続する。

C7.3 [接続基 3] 独立構造並置 3 ……条件接続基等

元来格関係で後件と接続していたもの。条件表示と「が」接続。

C7.4 [接続基 4] 前件 t(e)- 構造 ……前件構造属性に t(e)- 属性付加

接続基 2 に t(e)- アスペクト要素が付加されたもの。

C7.5 [接続基 5] 前件構造の包含実体化 ……前件包含実体が後件構造の要素
前件(文)が名詞化して後件(主文)の一部となる。

C7.6 [接続基 6] 前件構造の代置実体化 1 ……前件代置実体が後件構造要素

C7.7 [接続基 7] 前件構造の代置実体化 2 ……前件代置実体が包含実体要素

C7.8 [接続基 8] 前件構造の代置実体化 3 ……前件代置実体が仲介構造要素

いずれも前件内容が「それ」などにより代置される。基 6 ではそれが後件の直接構成要素となり、基 7 では後件の間接構成要素となる。

基 8 では後件構造の構成要素にならず、仲介構造の要素となる。

C7.9 [接続基 9] 独立構造並置 4 ……前件構造関連実体が後件構造の要素

C7.10 [接続基10] 独立構造並置 5 ……前件構造不関連実体が後件構造要素

基 9 は添加・並列、基 10 は話題転換という形で接続する。

接続基10種類

表C7-1

	接続基名	構造の特徴	接続基表層形式	後件との接続力
終止	接続基1	独立構造並置1 構造的にも描写的にも2構造が独立している。	前件述語基本描写(終止形)	論流認識力
連用	接続基2	独立構造並置2 構造的に独立した2構造が、描写において関連する。	前件述語連続描写(連用形)	連合力(連用形)
接続助詞等	接続基3	独立構造並置3 構造的に独立した2構造が、描写において関連する。(条件基)	ば, たら(ば), なら(ば), と / が	(も)とは格の力 論流認識力
	接続基4	前件t(e)-構造 前件構造がt(e)-属性を持ち、描写において関連する。	て, ては, ても(でも) / たり(だり)	連合力(連用形)
	接続基5	前件構造包含実体化 前件包含実体が後件構造の構成要素となる。	ので, のに, ながら, から(に)は, から	格の力
接続詞等	接続基6	前件構造代置実体化1 前件代置実体が後件構造の構成要素となる。	それで, そこで, で, それでは, では, それでも, でも, それから	格の力
	接続基7	前件構造代置実体化2 前件代置実体が包含実体の一部となり, その包含実体が後件構造の構成要素となる。	だから, それなのに, それだのに, なのに, だのに, しかしながら, しかし, しかるに	格の力 連合力(連用形)
	接続基8	前件構造代置実体化3 前件代置実体が独立仲介構造の構成要素となる。仲介構造と後件構造も接続関係をもつ。	それに, くわえて, そ(う)して, ではあるが, だが, (だ)とすると, そうすると, とすると, すると, したがって, それにしても, なぜなら	[仲介構造関連] 格の力 連合力(連用形) 論流認識力
	接続基9	独立構造並置4 前件構造との関連を示す実体が後件構造の構成要素となる。	かつ, また	格の力
	接続基10	独立構造並置5 前件構造と直接関わりのない実体が後件構造の構成体となる。	ところで, ときに	格の力

C7. 0.1 構造間の論理関係を表す構造形式……接続基 1～接続基10

構造が 2つ(複数)存在する場合には、構造間に自ずと論理上の関係(論流)が発生する。その関係を積極的に表示するために、たとえば「ので」のように、構造レベルにおいてそのための形式が使用されることがある(図C7-28参照)。このような形式(例:「ので」)は「接続」のために用いられる慣用的な「基」となっているので「接続基」と呼ぶ。(「基」とは、詞がいくつか集まってひとつのまとまりをなし、全体として一定の構造形式と意味を保つものである。)

ここで、検討の対象となるべき接続基を確認するために、国語文法の「接続助詞」「接続詞」を参考に、①②のようなリストを作成した。

リスト① 接続助詞のリスト (接続助詞的な連語を含む。)

ば, と, が, のに, ので, から, て, では, ても(でも),
たり(だり), たら(ば), なら(ば), ながら, けれど(も), つつ,
し, なり, ものの, から(に)は

リスト② 接続詞のリスト (接続詞的な連語を含む。)

- a) 累加(添加) かつ, さらに, しかも, そして, そのうえ,
それから, それに, また, くわえて
- b) 並立 あわせて, かつ, そしてまた
- c) 選択 あるいは, それとも, なかんずく
- d) 転換 さて, それでは, では(じやあ), ときに, ところで
- e) 順接 したがって, そうすると, すると, そこで, そしたら,
そして, それで, それなら, それゆえ, だから,
(だ)とすると, ゆえに
- f) 逆接 が, けど, けれど(も), されど(も), しかし,
しかしながら, しかるに, そのくせ, それでも,
それなのに, それだのに, でも, それにも, だが,
ではあるが, だけど, だとしても, だのに, なのに,
ところが, とはいえる, とはいいうものの, にもかかわらず
- g) 説明 すなわち, たとえば, つまり
- h) 補説 けだし, ただし, だって, なぜなら, もっとも

リスト中の下線のある接続基は、現在10種類に分類することができている（表C7-1）。ただ、接続基構造の解明が進めば接続基の種類が増える可能性もある。以下において10分類された基のそれぞれを検討するが、前件述語は基本的に動詞に限定する。形容詞はこれに準じた扱いとなる。

検討の対象となる接続基のリスト

接続基のリスト①「接続助詞のリスト」、②「接続詞のリスト」を準備したが、これですべてであるというわけではない（「AとB」のように列挙する形で接続するものは C3.1 で扱っている）。リスト中の下線のある接続基は本章で構造表示の実現しているものである。下線のないものには、構造表示のできた形式と同様に扱えるものもあるが、構造解明を今後に期待するものもある。

このリストにないものでも、同様に考えていいけるはずである。

◎ 接続助詞が接続詞の構成要素になっている場合がある

たとえばリスト②接続詞リストの中の「したがって」のように、接続詞が自身の中に接続助詞（「て」）を含んでいることがある。「だから」「すると」「それなのに」などでも同じである。つまり、より小さい基である接続助詞の構造が判明すれば、それを含む接続詞の構造は考えやすくなるという状況にある。

接続助詞にはリスト①に挙げたようなものがある。このうち、かなりのものの構造が解明している。本章において未解明のままになっているものは「けれど（も）、つつ、し、なり、ものの」である。ただし、次のように予測はされている。

けれど（も） =k-i=ar-e=do-mo

つつ -i=t;θ-u=i-θ=t;θ-u

し =s-i

なり =θ包-ni=ar-i

ものの =mono-no

予測はされていても、これらは理論的に十分に説明できない状況にある。

C7.1 [接続基 1] 独立構造並置 1……前件構造属性の基本描写

「接続基 1」は、独立の 2 構造を並置し、 $-(r)u$ による基本描写をするのみで、前件後件間の関連づけは形式的には行わない。論理関係すなわち論流の有無に関する構造形式による積極的な表示をしないタイプのものである。論理関係(論流)の把握は出来事相互の関係についての認識力に委ねられている。

独立の 2 構造は、異主語 2 構造(接続基 1-1)と、同一主語 2 構造(接続基 1-2)の場合がある。

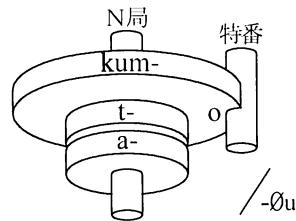
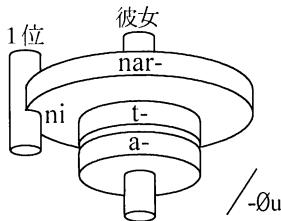
C7.1.1 接続基1-1 異主語構造並置

まず、主語が異なる複数の構造を並置する場合である。この場合、構造は横並置となる。

C7-1> 彼女が 1 位になった。N局が特番を組んだ。 (図C7-1, -2)

「接続基 1」の場合は、構造間にある論理関係が順接であるか逆接であるかは状況が分からなければ決定することはできない。たとえば、前件「彼女が 1 位になった。」が特番を組むのにふさわしいと判断される場合であれば、順接となり、接続詞「それで」を補うことができる。

C7-2> 彼女が 1 位になった。 (それで,) N局が特番を組んだ。



図C7-1 彼女が 1 位になった(-θu)。 図C7-2 N局が特番を組んだ。

前件が特番を組むほどの話題性もないと判断されるような場合には逆接であり、接続詞「しかし」を補うことができる。

C7-3> 彼女が 1 位になった。 (しかし,) N局が特番を組んだ。

このように「接続基 1」では、論流は構造レベルで積極的に示されず、状況内での自然な認識(つまり、認識者の妥当とする論理関係の認識)に委ねられている。

次の同一主語構造並置の場合も同様である。

C7.1 接続基1-2 同一主語構造並置

この「同一主語構造並置」では、主語が同一である2つの単位構造が並置される。この場合、主語が同一なので、構造は縦並置となる。ただし、特に問題がない場合には横並置にしてもよい(図C7-19 参照)。

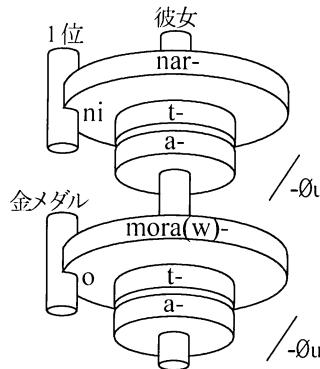
C7-4> 彼女が1位になった。彼女が金メダルをもらった。

この例の場合は、自然に認識される接続の論理関係は「順接」である。

C7-5> 彼女が1位になった。(それで,) 彼女が金メダルをもらった。

「接続基」が接続の構造形式を持たないということは「接続基」という名称に矛盾しているようにみえるが、接続基としての構造上の形式がないことがこの接続基の特徴となっている。しいていえば、「接続基1」は基本描写($-\emptyset u$) (終止形)という描写法のことであるといえる。2構造間にどのような論理関係があるかの判断は、自然に感知されるままに委ねられている。

この場合の「接続」を実現させている力は、構造上の力、描写上の力ではなく、ある状況における出来事相互の関係についての認識力である。



図C7-3 彼女が1位になった($-\emptyset u$)。彼女が金メダルをもらった。

C7.2 [接続基2] 独立構造並置2……前件構造属性の連続描写

「接続基2」は「接続基1」と同様、独立の構造を並置するものであるが、「接続基1」と異なり、前件構造の属性を描写する際に連続描写($-i/-\emptyset i$) (連用

形)を適用し、中止め形式の描写を行って、後件構造との間に論理関係が存在することを明示する。順接、逆接等の論理関係の種類については明示しないが、実際には、たとえば次のように特定の論理関係が関知される。

順接 (円が安く nar-i, 輸出がしやすくなった。)

逆接 (これほど hatarak-i, 豊かにならない。)

継起 (そこでバスを ori-Øi, 地図を見ながら歩いて行った。)

並立 (朝はパンを tabe-Øi, 昼はうどんを食べる。)

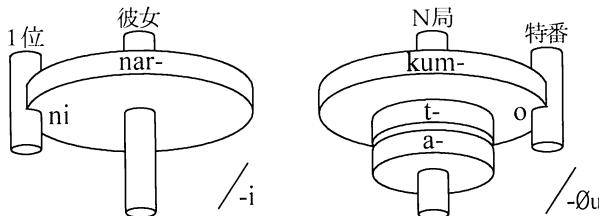
ここに働いている接続の力は「連合力(連続描写)」である。接続基1と同様、主語の異なる2構造が並置される場合と、同一主語を持つ2構造が並置される場合がある。

C7.2 接続基2-1 異主語構造並置

これは主語が異なる2つの構造を並置するものであり、横並置となる。

C7-6> 彼女が1位になり(nar-i), N局が特番を組んだ。

この例では nar-i の -i による連続描写がなされており、後件文との間に論理関係の存在することが積極的に示されている。ここでの論理関係(論流)は順接である。



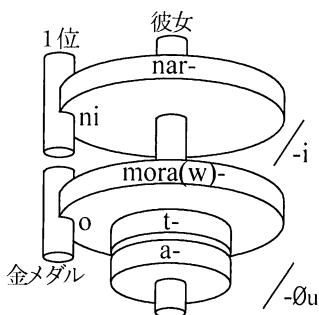
図C7-4 彼女が1位になり(nar-i), N局が特番を組んだ。

C7.2 接続基2-2 同一主語構造並置

ここでは、主語が同一の2つの構造を並置する。この場合、構造は縦並置となる。(横並置でもよい。)

C7-7> 彼女が1位になり(nar-i), 金メダルをもらった。

この例でも -i によって論理関係(順接)の存在が積極的に示されている。



図C7-5 彼女が1位になり(nar-i), 金メダルをもらった。

C7.3 [接続基3] 独立構造並置3……条件接続基等

「接続基3」でも別々の構造を並置するが、「接続基3」の特徴はその並置された構造が元來は格関係で関係をもっていたものであることで、現代語としては2種類が考えられる。第1種は並置構造が条件構造と帰結構造になっているもので、接続形式としては「ば」「たら(ば)」「なら(ば)」「と」の表層形式が前件文に続くものがこれに当たる([接続基3.1 第1種])。第2種は、逆接関係を導くことも多いが、基本的に多様な接続関係の存在を示す「が」がこれに当たる([接続基3.2 第2種])。

「接続基3」は表層文法の「接続助詞」に当たる。

C7.3 [接続基3.1 第1種] まず第1の種類から見てみる。

C7.3 接続基3-1 [ば] 条件接続基 -eba

C7-8> 彼女が1位になれば (nar-e~~a~~ba) , N局が特番を組む。

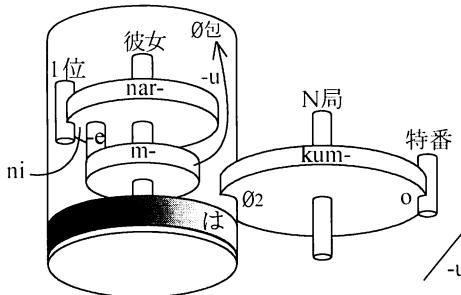
この例文の「ば -eba」は元來

C7-9> -am-u=Ø包-Ø2-ha

という形式をしており (A6.1~A6.6), この先頭の -a が -e に変わって

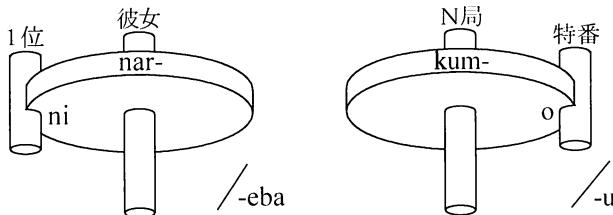
C7-10> -em-u=Ø包-Ø2-ha

という形で形成されたものである (A6.7~A6.8)。構造は 図C7-6 のようになっている。



図C7-6 彼女が1位になれば (nar-eba), N局が特番を組む。

しかし、現代語では表層音形式が -eba という単純な形式になってしまっているので、常に元の形式において構造を考えるのは非常に煩わしい。それで、-eba を、並置された独立の構造を関連づける機能を持つものとし、描写において前件属性に付加するものとする (図C7-7) (A6.9 参照)。(「ば」は省略不可)



図C7-7 彼女が1位になれば (nar-eba), N局が特番を組む。

C7.3においてこのような便宜的な扱いをするものを「条件接続基」と呼ぶことにする。

C7.3 接続基3-2 [たら(ば)] 条件接続基 -a(ba)

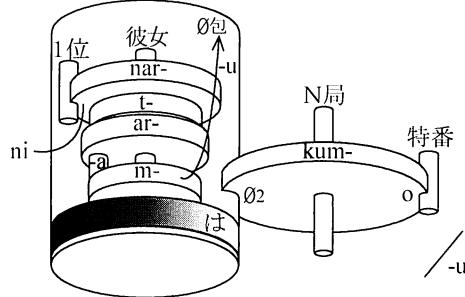
C7-11) 彼女が1位になつたら(ば), N局が特番を組む。

この例文の「たら(ば)」については、上に述べた現代語としての「ば」の扱いで考えれば、「nar-i=t-θ=ar-a(ba)」であるものと/or/することができる。

この「たら(ば)」は元來「ば」にアスペクトの要素 (t-θ=ar-) を組み込むために生じた形式であり、「ば」とは次のような関係にある (A8.1~A8.3)。

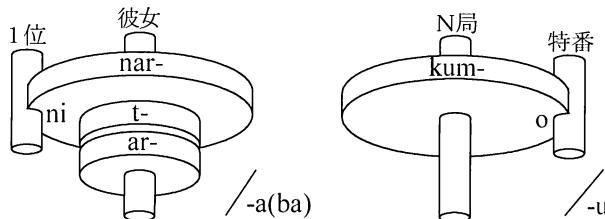
- C7-12> (nar-)_____ -am-u=Ø包-Ø2-ha 「ば」
 (nar-)i=t-Ø=ar-am-u=Ø包-Ø2-ha 「たら(ば)」

構造は図C7-8 のようになっている。(ar- は大きめに表示してある。)



図C7-8 彼女が1位になつたら(ば), N局が特番を組む。

しかし、現代語では「たら(ば)」という単純な形式になってしまっているので、「ば」同様、常に元の形式において構造を考えるのは非常に煩わしい。それで、-a(ba) を「条件接続基」とすることにし、図C7-9 のように並置された独立の構造を関係づける機能を持つものとし、描写時に前件属性に付加するものとする (A8.5)。(「ば」は省略可)



図C7-9 彼女が1位になつたら(ば), N局が特番を組む。

なお、元来は、もし前件内容が既定のことであれば、図C7-8中の ar-am-のところは ar-em-となり、「たら(ば)」ではなく、「たれ(ば)」という形になっていた。

- C7-13> (nar-)i=t-Ø=ar-am-u=Ø包-Ø2-ha 「たら(ば)」 (未定)
 (nar-)i=t-Ø=ar-em-u=Ø包-Ø2-ha 「たれ(ば)」 (既定)

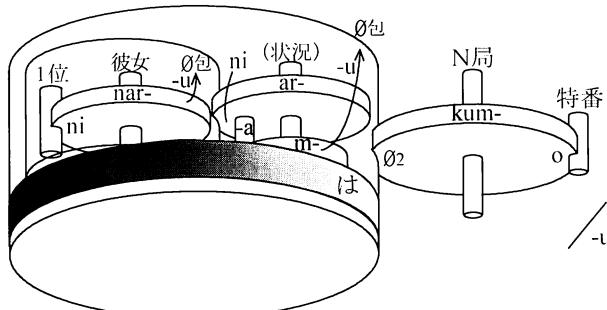
しかし、「たれ(ば)」が歴史的変化の結果「たら(ば)」と同じになってしまったので、今日では未定、既定のいずれにおいても「たら(ば)」が使用されるようになっている (詳しくは A8.4 参照)。

C7.3 接続基3-3 [なら(ば)] 条件接続基 -a(ba)

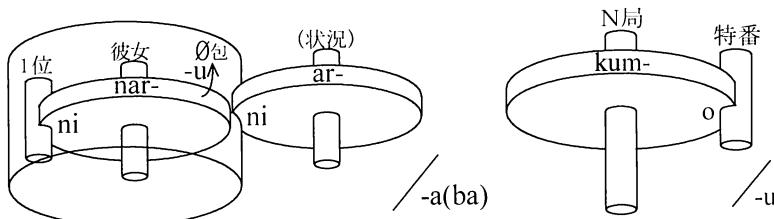
C7-14> 彼女が1位になるなら(ば), N局が特番を組む。

この例文の「なら(ば)」の構造は、「nar-u=θ包-ni=ar-a(ba)」である。この形式では、前件構造属性の nar- に直接条件接続基が付くわけではなく、前件構造が一度包含実体の中に入れられてから条件接続基が付くことになっている。これは、出来事そのものではなく、「(特に他者の設定する)状況」の生起を条件にするために生じた形式であるからである。構造は図C7-10のように示すことができる。

しかし、現代語ではやはり「なら(ば)」という単純な形式になってしまっているので、「ば」「たら(ば)」同様、常に元の形式において構造を考えるのは非常に煩わしい。それで、「たら(ば)」でのように、-a(ba) を「条件接続基」とすることにし、図C7-11のように並置された独立の構造を関係づける機能を持つものとすることにする。(「ば」は省略可)



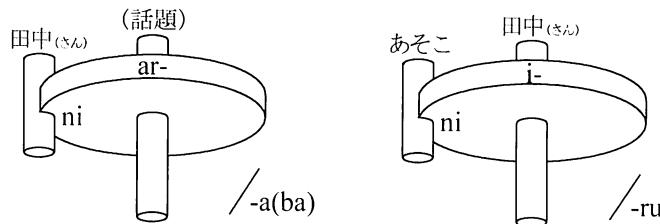
図C7-10 彼女が1位になるなら(ば), N局が特番を組む。



図C7-11 彼女が1位になるなら(ば), N局が特番を組む。

ちなみに、C7-15> のような場合、つまり、前件構造が実体(名詞)のみで構成されており、話題・関心を提示しているような場合には、図C7-12 の構造として示すことになる。ここには出来事構造を実体化する包含実体はない。

C7-15> 田中さんなら(ば), あそこにいる。



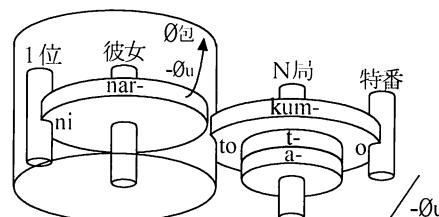
図C7-12 田中さんなら(ば), あそこにいる。

以上の「たら(ば)」「なら(ば)」は「ば系」の条件接続基であるが、次の「と」も条件接続基としておく。

C7.3 接続基3-4 [と] 条件接続基 -(r)u=to

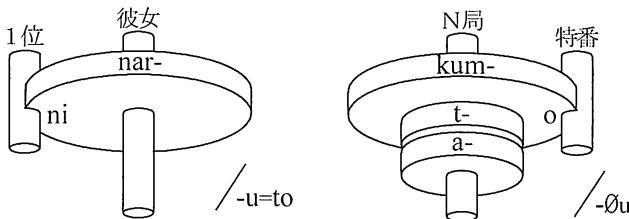
C7-16> 彼女が1位になると, N局が特番を組んだ。

この例の場合、語源的には「ゼロ包含実体」が to 格に置かれているものと考えられ、構造は図C7-13であると考えられる (A16.5 <41> の注1参照)。格の力が働いている。



図C7-13 彼女が1位になると, N局が特番を組んだ。

現代語としてもこの構造で扱ってよいのであるが、「と」は「ば, たら(ば),なら(ば)」と同じように条件を表すので、「と」も同様に条件接続基とすることにする。それで、 $-(r)u=to$ と表示し、独立する構造を接続する機能を持つものとし、図示では 図C7-14 のようにする。



図C7-14 彼女が1位になると、N局が特番を組んだ。

以上に見るとおり、「接続基3」は、元来前件構造が包含実体の中に入り、その包含実体が格の力で後件構造に結合していたものであり、形式からすれば「接続基5」に属するものである。しかし、現代語として扱いやすくするためにには「条件接続基」-eba, -a(ba), -(r)u=to を設定することが望ましい。それで、これを設定した。この形式は、独立並置構造の前件構造を「条件」にし、「帰結」の内容を持つ後件へ接続する機能を持つものと認められる。

C7.3 [接続基 3.2 第2種] 次に第2の種類を見てみる。「が」である。

C7.3 接続基3-5 [が]

「が」は元来「の」と同じく名詞どうしをつなぐ機能をもつ（つまり、名詞で名詞を修飾する際に使用される）ものであったが、連用格詞へと発展し、平安時代には主格用法において動詞・助動詞の連体形を受けることが可能となっていた（下例参照）。続く鎌倉時代にかけて「が」の前の連体形で終わる部分が一文の終結として意識されるようになり、「が」をはさんで上下に二文が存在するものと感じられるようになった。このようにして接続助詞としての「が」が誕生した。このことを示す一つの例として、石垣（1955:37）は源氏物語・桐壺冒頭文の後半部を引いている。

いとやんごとなき際にはあらぬが勝れて時めき給ふ有りけり
そこで、この文の構造を考えてみたい。（「やんごと」を元の形式「やむこと」に復元して扱う。）

C7-17> いとやむことなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり
『古典基礎語辞典』大野編（2011:301）での解釈は「位が高く優れた身分ではない方で、優れて時に遇って栄えなさる方があったのであるよ」となってい

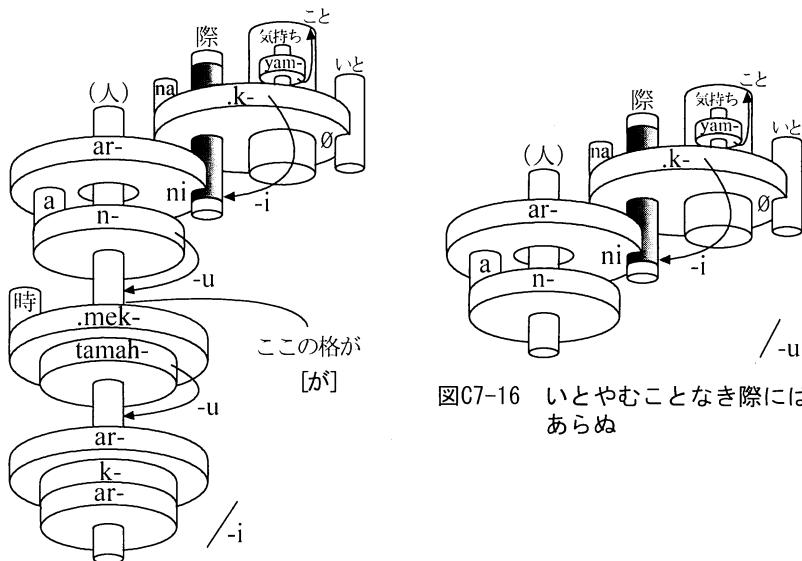
る。

この文の構造は図C7-15 のようになっている（ただし、「すぐれて」を省略してある）。

「が」の直前の「いとやむことなき際にはあらぬ」の ar-an-u の -u は連体形であり、明示されていない「人・更衣」を修飾しているものと考えられる。

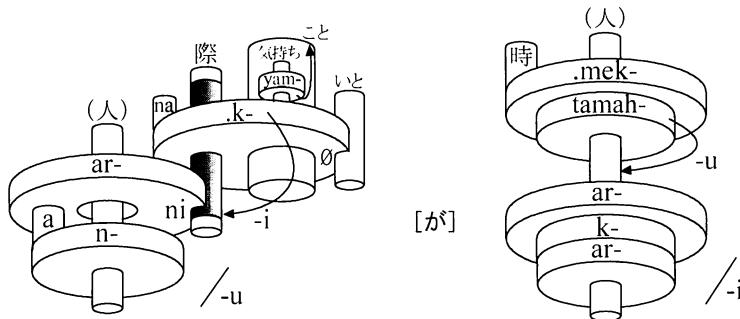
「が」は「いとやむことなき際にはあらぬ(人・更衣)」が主格にあり、それに続く部分が述語であることを示す格詞として機能している。

しかし、終止形が連体形と同形になるという歴史的状況を背景にして、ar-az-u が ar-an-u となり、-u が文を終止する終止形とも意識されるようになりつつあり（図C7-16），「が」の存在が文を二分し、仲介するものとしても感じられ始めていた。この流れで「が」は主格を示すものではなく、二文を仲介する機能を持つものと意識されることになった。この意識は鎌倉時代に明確なものとなった。



図C7-15 いとやむことなき際には
あらぬ(人)が時めきたまふ(人)ありけり

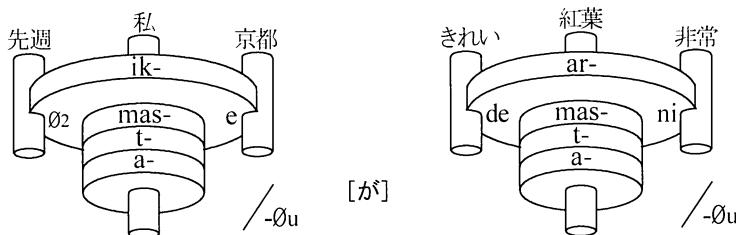
この「が」は単に文を仲介するだけのものとなり、構造は図C7-17のようなものとなった。接続の種類を積極的に明示するものとはならず、この構造の今まで今日に至っている。



図C7-17 いとやむことなき際にはあらぬ [が] 時めきたまふありけり
「が」は論流のあり方(接続の種類)を積極的には示さないので、理流1と理流2のあり方によって順接にも逆接にも、また、ほかの論流にもなりうる。

次の C7-18> の例では、「が」が前件に前置きとしてのニュアンスを与えている。

C7-18> 先週京都へ行きましたが、紅葉が非常にきれいでした。



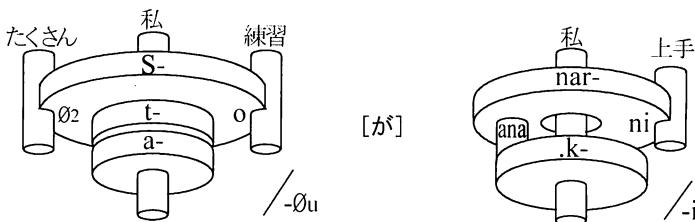
図C7-18 先週京都へ行きました [が] 紅葉が非常にきれいでした。

次の C7-19 a , b> の例では逆接を導いている。

C7-19 a> たくさん練習をしたが、上手にならない。 (図C7-19)

C7-19 b> たくさん練習をした。が、上手にならない。 (図C7-19)

この「が」は、C7-19 a> では接続助詞として、C7-19 b> では接続詞として使用(描写)されている。



図C7-19 たくさん練習した [が] 上手にならない。

「が」は、話者の持つ2文接続への意思を明示することになるので、話者が複数の文を接続して表現したいという欲求を持つ場合に使用され、時に過剰になることがある。

C7-20> 彼のことですが、タバコのことなんですが、一応忠告はしたのですが、やめるつもりはないという返事だったので、いろいろ弊害について繰り返したのですが、そして、それを聞いてはくれたのですが、聞き入れてはくれませんでした。

「が」もやはり元来は格関係を表示していたものであった。しかし、接続基となってからは、接続力をもたらすのは格の力ではなく、出来事間の関係（論流）認識力であるということになった。

C7.4 【接続基4】 前件 t(e)- 構造……前件構造属性に t(e)- 属性付加

「接続基4」でも別々の構造を並置するが、「接続基4」の特徴は前件構造の属性に「=te-(て)」を付加し、これに連続描写(-θi)を適用する形(=te-θi)で文の中止め描写を行い、後件構造との間に論理関係の存在することを表示することである。実際には「継起」「順接」「逆接」「並立」等が表現される（用例は C7.2【接続基2】参照……各例の前件にテを付加）。

「=te-(て)」は構造伝達文法のいう3つの助動詞のうちの1つである。（他の助動詞は =a(r)-, =mas-。この文法でいう助動詞は「元来動詞でありながら、歴史的变化の結果、もはや動詞としては働くはず、特定の意味において動詞(等の属性)を補助する役目を担うようになったもの」と定義される。『文法』10.1 参照。「て」が「で」になる音便についてはA 3章参照。）

「て」は動詞「棄(う)つ」の「棄」の部分が脱落してできた完了の助動詞

「つ」の連用形「て」に由来する(『文法』10.3)。連用形であるので、当然あと他の属性を続けることができるし、続けなければならない。ここに働く力を「連合力」と呼ぶ(『発展A』A17.2⑪)。(この力を持つ形態素は「連続描写詞」-(i)であり、「て」の場合は母音 e から続くために -ø となっている。ゼロだからといって意味のない・機能のない形態素であるわけではない。)

「接続基4」は表層文法では「接続助詞のテ」に当たる。

「=te-(て)」は「開始後の助動詞」であり、現代語においては局面が属性実現の開始以後にあることを表す。(『文法』10.3、『発展A』A4.5)。

また、「たり」をこの接続基4に含めることにする。「たり」は元来「てあり」で、次のように「て」を含む形式をしているからである。

C7-21> =t(e)-øi=ar-i

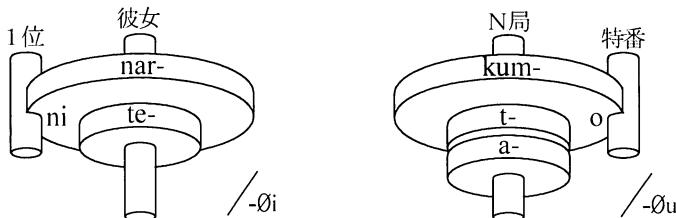
これを「てある」の連用形とみれば接続基2に属することになるが、「たり」という接続を意図した慣用形式とみなせば、ここにある「て=t(e)-øi=」は接続基を形成する要素とみなすことができる。「たり」が単独の「て」と異なるのは、類似の構造を並置しようという意図があることである。

C7.4 [接続基 4.1 異主語構造並置]

C7.4 接続基4-1 [て] ……異主語

ここでは主語が異なる複数の構造を並置するので、構造は横並置となる。

C7-22> 彼女が1位になつて(nar-i=te-øi), N局が特番を組んだ。



図C7-20 彼女が1位になつて(nar-i=te-øi), N局が特番を組んだ。

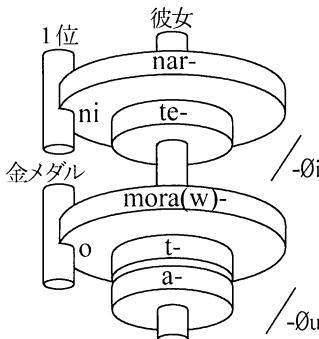
C7.4.2 [接続基 4.2 同一主語構造並置]

C7.4 接続基4-2 [て] ……同一主語

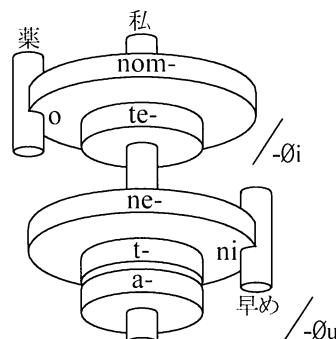
ここでは主語が同一の複数の構造を並置する。この場合、構造は縦並置となる。しかし、特に問題がなければ、横並置にしてもよい。

C7-23> 彼女が1位になって(nar-i=te-0i)、金メダルをもらった。

C7-24> 薬を飲んで(nom-i=te-0i)、早めに寝た。



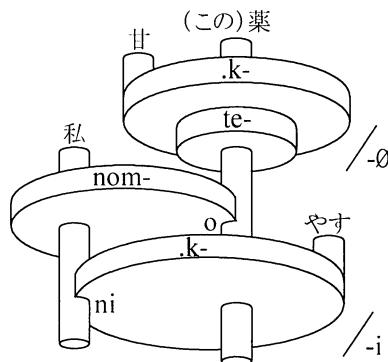
図C7-21 彼女が1位になって
(nar-i=te-0i)、金メダルをもらつた。



図C7-22 薬を飲んで
(nom-i=te-0i)、早めに寝た。

ここまで属性としてすべて動詞を扱ってきたが、ここで形容詞の例も扱っておきたい。

C7-25> (この)薬は甘くて(ama. k-u=te-0i)、飲みやすい。

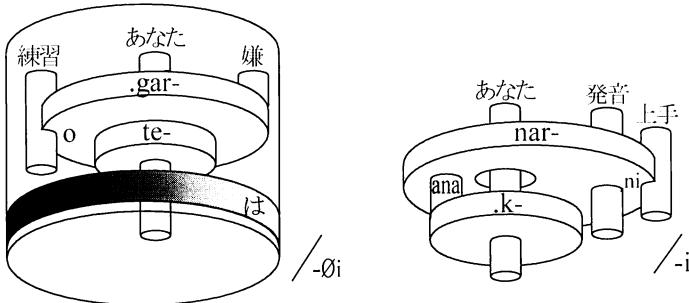


図C7-23 (この)薬は甘くて(u_{ma}. k-u=te-0i)、飲みやすい。

C7.4 接続基4-2 [ては]

「ては」の構造については『文法』42.2参照。

- C7-26> 練習を嫌がっては (iya.gar-i=te- \emptyset i=θ包-無格-wa),
発音が上手にならない。



図C7-24 練習を嫌がっては, 発音が上手にならない。

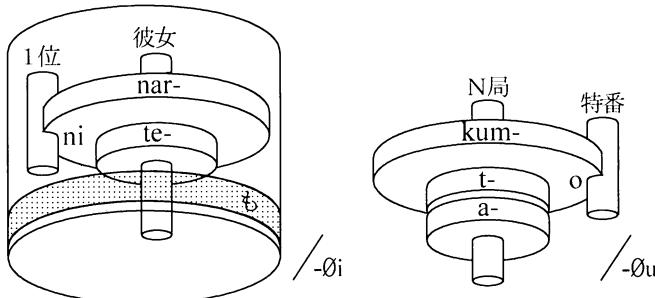
「発音」を主題化して描写することもできる。

- C7-27> 発音の1位は, 練習を嫌がっては上手にならない。

C7.4 接続基4-3 [ても]

次の例では異主語並置構造の「て」に相対化描写「も」（『文法』3.1①）が加わった形になっている。（同一主語の場合でも「ても」が考えられる。）

- C7-28> 彼女が1位になっても (nar-i=te- \emptyset i=θ包-無格-mo),
N局が特番を組んだ。



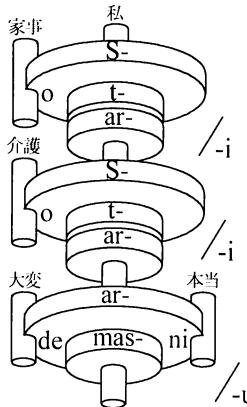
図C7-25 彼女が1位になっても, N局が特番を組んだ。

「は」が条件を、「も」が逆接を表すことから、「ては」は条件を、「ても」は逆接を表している。

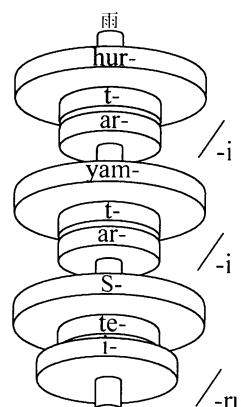
C7.4 接続基4-4 [たり] ([たり])

C7-29> 家事をしたり、介護をしたり、本当に大変です。

C7-30> 雨が降ったりやんだりしている。



図C7-26 家事をしたり、介護をし
たり、本当に大変です。



図C7-27 雨が降ったり、やん
たりしている。

「たり」を重ねて並列を表す用法は鎌倉時代から見られるようになったという(『日本語文法大辞典』「たり」並立助詞)。この「たり」は局面変化の認知基 =t-θ=ar- があとに別の属性を続けて描写するために連続描写詞の -i を伴うことになったものである。したがって、これも連合力による接続となる。

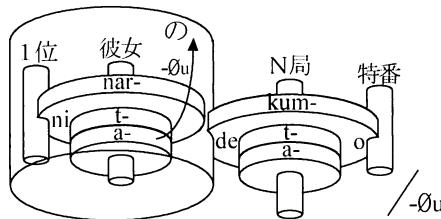
C7.5 [接続基5] 前件構造の包含実体化 …前件包含実体が後件構造の要素

「接続基5」は、「ので」「のに」のように前件構造を「の」等の包含実体に入れ、属性に包含実体への修飾描写(-r(u))を適用する形で前件構造の実体化を行い(雨が hur-u の)、その包含実体を後件構造に組み込んで後件構造との論理関係の存在を表示する。

「接続基5」は表層文法の「接続助詞」に当たる。ここに働いている接続の力は格の結合力である。

C7.5 接続基5-1 [ので]

C7-31> 彼女が1位になったので、N局が特番を組んだ。



図C7-28 彼女が1位になったので、N局が特番を組んだ。

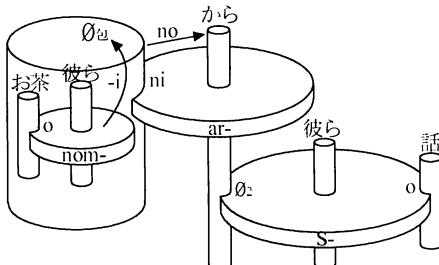
「彼女が1位になったの」が包含実体であり、これが「特番を組む」という属性に de 格で結合している。(nar-i=t-Øi=a-Øu の-de 特番-o kum-)

C7.5 接続基5-2 [のに]

ちなみに、「彼女が1位になったのに」の場合は、包含実体は de 格にではなく、 ni 格にある。論理関係も順接から逆接に変わる。構造では de 格のところが ni 格になる(図C7-28, 『文法』37.2 参照)。

C7.5 接続基5-3 [ながら]

C7-32> お茶を飲みながら、話をする。

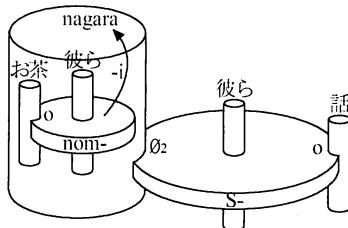


図C7-29 お茶を飲みながら(=のから)話をする。

「～ながら」はもともと「～のから」であった。この中の「から」は元来は実体(名詞)で、「族」の意味であった。それが、「素性・自然のなりゆき」等の意味を持つようになって、「～のから」で「～のなりゆき」の意味を生じた。

現代語では「お茶を飲みながら話をする」のように使用されており、その構造は図C7-29 のようになっている。「お茶を飲む行為になりゆきがあり、そのなりゆきにおいて話をする」わけである(『文法』42.1 参照)。

しかし、現代語としては便宜的に「ながら」という包含実体を設定してしまった方が扱いやすいので、図C7-30 のような構造として扱うこととした。こうすることによって、これが「接続基5」という分類項に入ることになった。

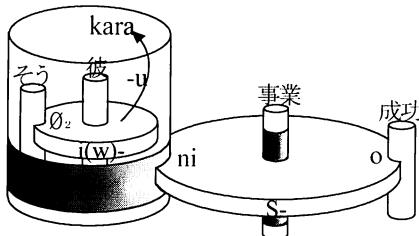


図C7-30 お茶を飲みながら話をする。

C7.5 接続基5-4 [から(に)は]

次の例では包含実体は「から」である。「から」は上述のように元来実体(名詞)で、「族」の意味を起源とし、「素性・自然のなりゆき」等の意味を持つようになった。そしてさらに、ある構造の内容を後件構造の原因・理由とするための包含実体となった(『文法』42.1参照)。

C7-33> 彼がそう言うから(に)は、事業は成功する。



図C7-31 彼がそう言うから(に)は、事業は成功する。

「彼がそう言うからには」の「から」は「彼がそう言う」を名詞化する包含実体として機能しており、これに格詞の「に」がついている。(もしこの「から」を格とすると、これに別の格「に」が続くことの説明ができない。)

「から」はさらに原因・理由（・起点・順序・経由点・原料等）を表す「格」となって今日に至っている。C7-34>, -35> のとおりである。

C7-34> 彼の発言から, 誤解が生じた。

C7-35> 暑さから, 池に飛び込む人もいた。

ただし、「から」という形式は、原因・理由を表す場合にはなお格になりきらず、包含実体としての特性を残している部分があり、

C7-36> *練習から, 腕が痛くなった。

C7-37> *寒さから, 窓を閉めてください。

C7-38> *元気から, 心配しないで。

のような場合は「練習したから」「寒いから」「元気だから」のように、「から」の前を属性にし、いったん包含実体を作らなければならない。「から」は包含実体である場合と格である場合とがあり、格としては移行期にあると考えられる。

ここで「から」について簡単にまとめれば次のようになる。

実体「から」（名詞で「素性・自然のなりゆき」等の意味を持つ。）

→ 包含実体（形式名詞で、前の文の内容を後の文の原因・理由とする。）

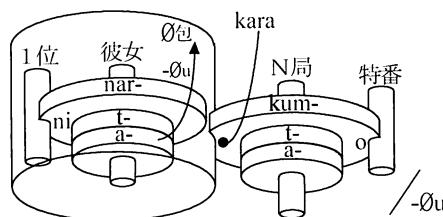
実体としてニ格ないしØ2格に置かれる。）

→ 格（原因・理由・起点・順序・経由点・原料等の論理関係を表す。）

C7.5 接続基5-5 [から]

上述のように「から」は完全に格になりきっていないので、ゼロ包含実体を必要としている場合がある。図C7-32ではゼロ包含実体が kara 格に置かれ、nar-i=t-Øi=a-Øu Ø包-kara という形になっている。

C7-39> 彼女が1位になったから, N局が特番を組んだ。



図C7-32 彼女が1位になったから, N局が特番を組んだ。

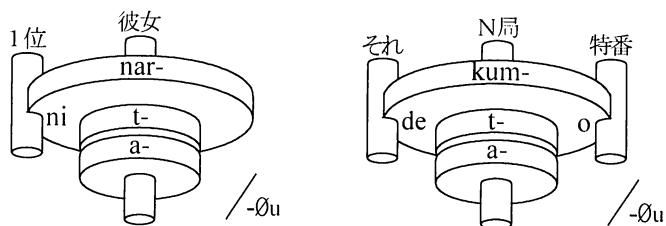
C7.6 [接続基6] 前件構造の代置実体化1 …前件代置実体が後件構造要素

「接続基6」では、まず、前件構造の属性を基本描写(-θu)により描写して文として完結させる。次に、前件構造を「それ」等の代置実体に換えて、後件構造に組み込む。このような形で前件内容と後件内容の関連を表示する。

「接続基6」は表層文法の「接続詞」に当たる。代置実体と後件属性の間に働いている接続の力は格の結合力である。

C7.6 接続基6-1 [それで]

C7-40> 彼女が1位になった。それでN局が特番を組んだ。



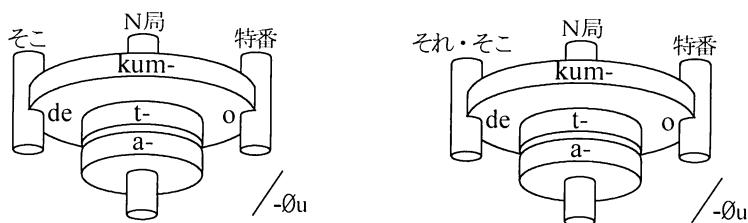
図C7-33 彼女が1位になった。それでN局が特番を組んだ。

「それ」は kum- と de 格で結合している。

C7.6 接続基6-2 [そこで]

C7-41> 彼女が1位になった。そこでN局が特番を組んだ。

上の例文、構造図C7-33 の後件構造中の「それで」の「それ」を「そこ」に換えれば「そこで」の形式、構造になる(図C7-34)。



図C7-34 そこでN局が特番を組んだ。 図C7-35 で N局が特番を組んだ。

C7.6 接続基6-3 [で]

図C7-33, 図C7-34の「それで」あるいは「そこで」の構造を描写するにあたって「それ」「そこ」を省略描写すれば、「で」という表層形式が得られる(図C7-35)。

C7-42> 彼女が1位になった。で, N局が特番を組んだ。

C7.6 接続基6-4 [それでは]

C7-43> 話者A：中央線は運行停止中です。

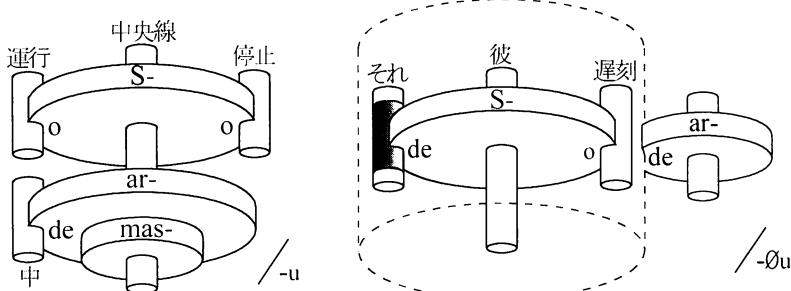
話者B：それでは彼は遅刻だ。

この例では話者Aの「中央線は運行停止中です。」という発話を受けて、話者Bがその内容を「それ」で表し「それでは彼は遅刻だ。」と応じている。

ここにある「それでは」は、「それ」が前件構造の代置実体となっていて、それが「遅刻-o する」という併合属性(A17.2 ⑫)に de 格で関わっている。また、「は」による相対化描写にもなっていて、「は」の条件性(『発展A』A6.6 b))が生かされている。

「停止+中」という描写は「第4修飾 複合」に当たる(A17.2 ⑯)。

「それでは彼は遅刻だ。」の文末の「だ」は、文の形を整えるためだけの形式断定基(『文法』11.4)であり、後件構造の実質とは関係がない(いわゆる「うなぎ文」)。この「だ」は省略してもよい。



図C7-36 A：中央線は運行停止中です。 B：それでは彼は遅刻だ。

なお、「それでは」はものごとの区切りの表示に使用されることがある。

C7-44> それでは、これから始めます。

この例のような場合は、「それ」に代置されている前件構造は、たとえば「定刻になりました。」や「皆さんそろいました。」等であると考えられる。

C7.6 接続基6-5 [では]

「それでは」の構造形式そのままに、「それ」を描写しなければ、「では」となる。

C7-45> 話者A：中央線は運行停止中です。

話者B：では彼は遅刻だ。

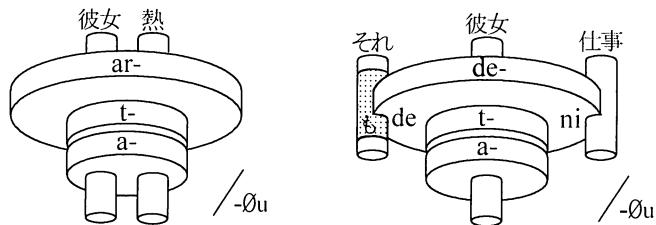
構造形式は図C7-36と同じである。

C7.6 接続基6-6 [それでも]

次の例では「それ」に「も」が付加されて逆接の論理関係を生じている。
(「も」は逆接になりやすい。C7.4 接続基4-3 参照)

C7-46> 彼女は熱があった。それでも仕事に出た。

「彼女は熱があった。」の構造は複主体の構造である(『文法』第19章参照)。
(ただし、「彼女 もには熱があった」のように考えることもできる。)



図C7-37 彼女は熱があった。それでも仕事に出た。

C7.6 接続基6-7 [でも]

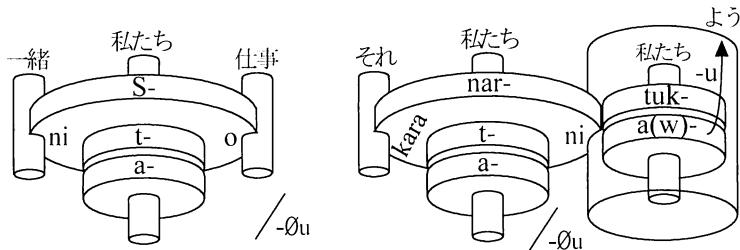
図C7-37 の「それでも」の「それ」を描写しなければ「でも」が得られる。

C7-47> 彼女は熱があった。でも、仕事に出た。

C7.6 接続基6-8 [それから]

前件構造の代用となる「それ」を、時間的起点を表す「から格」に置けば、「それから」になる。（「それ」を省略することはできない。）

C7-48> 一緒に仕事をした。それから付き合うようになった。



図C7-38 一緒に仕事をした。それから付き合うようになった。

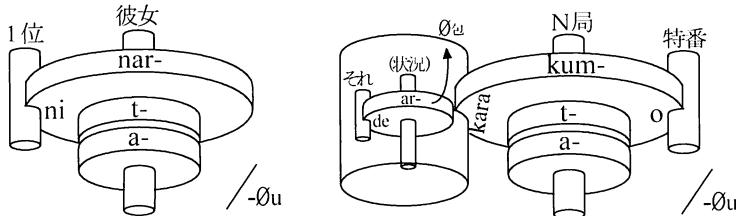
C7.7 [接続基 7] 前件構造の代置実体化 2 …前件代置実体が包含実体要素

「接続基 7」では「接続基 6」同様、まず、前件構造の属性を基本描写(-øu)により描写して文として完結させる。次に、前件構造を「それ」等の代置実体に換えて、接続のための慣用構造中に設置する。その慣用構造が後件構造に組み込まれる。つまり、代置実体は間接的に後件構造と関わりを持つことになる。代置実体が後件属性と直接に関係を持たないところにこの「接続基 7」の特徴がある。

「接続基 7」は表層文法では接続詞に当たる。

C7.7 接続基7-1 [だから]

C7-49> 彼女が1位になった。だからN局が特番を組んだ。



図C7-39 彼女が1位になった。だからN局が特番を組んだ。

「だから」の部分は次のような構造になっている。

C7-50> $d(e)=a(r)-u=\emptyset$ 包-kara

先頭の d は格だから実体(名詞)がなければ存在しないはずである。ここには前件構造の代置となる「それ」(あるいは「そう」)の存在が考えられる。

C7-51> それ-d(e)=a(r)-u=\emptyset包-kara

このとき $a(r)-$ の主体は表現されないが、理論的には「状況」のようなものと考えられる。図C7-39 のような構造となる。

C7-52> (状況が) それ-d(e)=a(r)-u=\emptyset包-kara

この構造が、慣用表現として「だから」と描写される。「であるから」と描写されることもある。

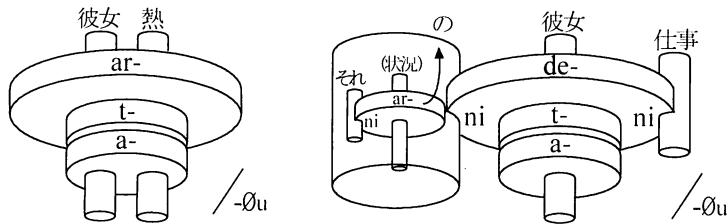
C7.7 接続基7-2 [それなのに]

C7-53> 彼女は熱があった。それなのに仕事に出た。

「それなのに」の部分の構造をそのまま描写すれば「それにあるのに」となるが、実際は省略描写されて「それなのに」となっている。

C7-54> (事態が) sore-ni=ar-u=の-ni (構造)
sore-n =a の-ni (省略描写)

最後の ni 格は後件生起の状況を表す ni 格と考えられる。逆接論流を生む。



図C7-40 彼女は熱があった。それなのに仕事に出た。

C7.7 接続基7-3 [それだのに]

「それだのに」の場合は「それなのに」の ni 格が de 格になる。

C7-55> (状況が) sore-ni=ar-u=の-ni (それなのに)
sore-de=ar-u=の-ni (それであるのに)
sore-d =a の-ni (それだのに)

構造は図C7-40 の「それ」の格が ni 格から de 格に変わった構造になる。

C7.7 接続基7-4 [なのに] [だのに]

構造形式は「それなのに」「それだのに」のままで、「それ」の部分を省略描写すると、「なのに」「だのに」が生じる。それで、「なのに」の構造は図C7-40 と同じで、「だのに」の構造図は図C7-40 の包含実体内の ni 格を de 格に変えた構造になる。

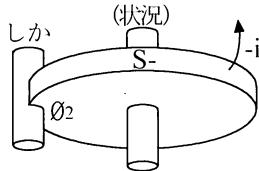
なお、「なので」の形の接続詞が発生しているが、これは図C7-40 の「の」が de-(出) の ni 格から de 格に移動し、順接になったものである。

C7.7 接続基7-5 [しかしながら]

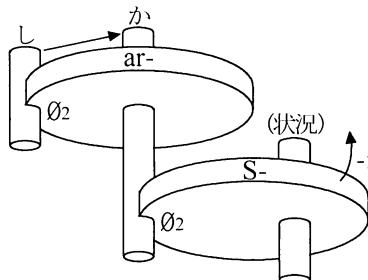
C7-56> 彼女は熱があった。しかしながら仕事に出た。

「しかし」という接続詞は、「しかしながら」というのが元来の形であって、「しかし」のみで使用されるようになったのは近世からである（『小学館 古語大辞典』「しかしながら」の項、「語誌」参照）。

「しかしながら」の「しかし」の部分は sika-θ2=s-i という構造を持っている（図C7-41）。



図C7-41 しかし(sika-θ2=s-i)



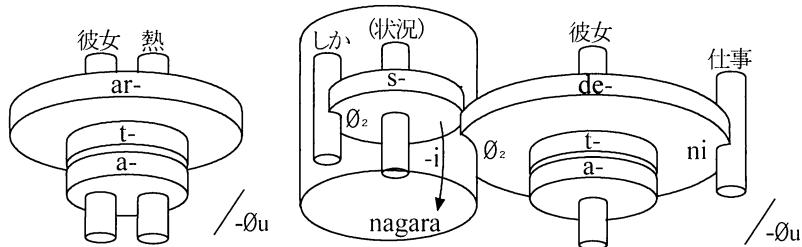
図C7-42 しかし([し+か]-θ2=s-i)

「しか sika」は「そのよう」という意味を持つ実詞で、前件の内容を示している。前掲書によれば、「代名詞『し』に、情態を表す接尾語『か』」がついてできた語。叙述された、または叙述される内容を指示する」とあり、漢字では「然」を当てる。したがって「しかし」を「し+か」とする場合の構造はたとえば図C7-42 のような構造として考えられる。ただし「*し ar-u か」のよう

な実体修飾された表層形式ではなく、常に「しかし」という表層形式で描写される、一種の基である。

「しかし sika-θ₂=s-i」の =s- は動詞で、意味は「あり」である(『文法』11.5 参照)。-i は実体修飾第2描写詞であり(『文法』表5-6 及び 9.2参照)，便宜的に設定された包含実体「ながら」を修飾している(図C7-43)。

「ながら」はここでは便宜的に包含実体として扱っているが、本来は「のから」であり、構造も異なっている(『文法』第42章「特殊な包含実体」参照)。

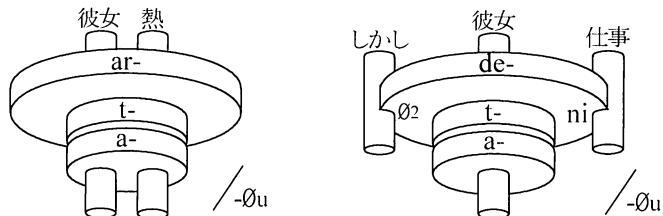


図C7-43 彼女は熱があった。しかししながら、仕事に出た。

C7.7 接続基7-6 [しかし]

C7-57> 彼女は熱があった。しかし、仕事に出た。

とはいえる、「しかし」をいつもこのような構造で描くことは面倒であり、また、図C7-43において、「しかしながら」を θ₂格に立つ一つの実体とみなして扱っても支障は生じないことから、便宜的に「しかしながら」、「しかし」という実詞を想定してもよいだろうということになる。それで、「しかし」を図C7-44 のようにすることにする。



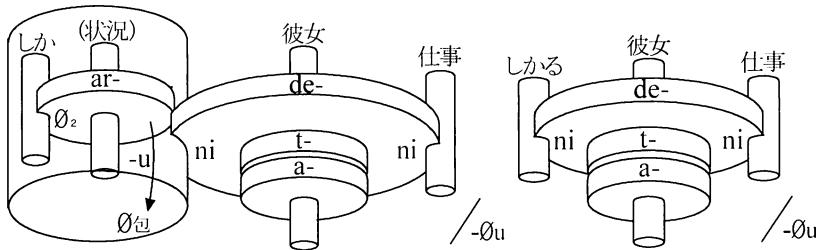
図C7-44 彼女は熱があった。しかし、仕事に出た。

C7.7 接続基7-7 [しかるに]

「しかし」に似た形式として「しかるに」がある。

C7-58> 彼女は熱があった。しかるに、彼女は仕事に出た。

「しかるに」は「しかあるに」の縮約形で(『日本語文法大辞典』等参照), 構造は図C7-45 のようになる。



図C7-45 しかるに 彼女は仕事に出た。 図C7-46 しかるに……

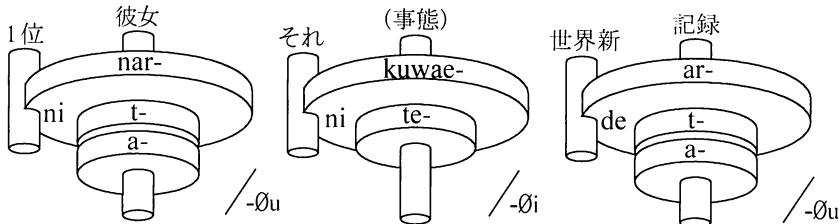
「しかし」同様, 図C7-46 のように「しかる」を1実体と想定すると扱いやすくなる。

C7.8 [接続基8] 前件構造の代置実体化3 …前件代置実体が仲介構造要素

「接続基8」では「接続基6」「接続基7」同様, まず, 前件構造の属性を基本描写(-θu)により描写して文として完結させる。この前件構造を「それ」等の代置実体に換えて, 「接続基6」ではそれを直接後件構造に組み込み, 「接続基7」ではそれを接続のための慣用構造中に設置し, その慣用構造を後件構造に組み込む。「接続基8」ではその代置実体の設置された慣用構造が後件構造に組み込まれることなく, 独立した構造として後件構造と並置されることになる。つまり, 独立した前件構造と後件構造の間に, 独立した接続構造が介在することになる。ここに生じた仲介接続構造(仲介構造)と後件構造に接続関係が存在し, その接続関係は「接続基3」ないし「接続基4」のいずれかの形式になっている。

C7.8 接続基8-1 [それに]

C7-59> 彼女が1位になった。それに、記録は世界新だった。



彼女が1位になった。それに、記録は世界新だった。

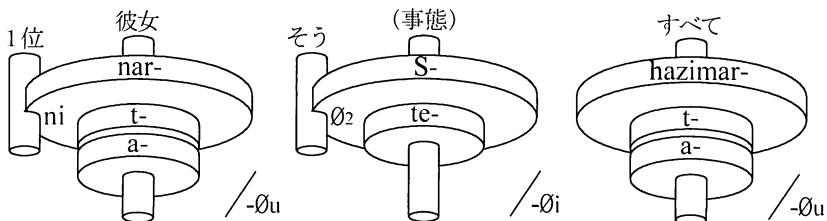
図C7-47 彼女が1位になった。加えて、記録は世界新だった。

「それに」は後件の「新記録である」という属性に直接関わると考えられないこともない。その場合は接続基6になる。しかし、「それに加えて」という独立した接続構造が仲介構造として形成されるものと考えた方がより自然である場合もある。その場合にすなわち接続基8となる。この仲介構造が後件構造と関わるのは接続基4（「て」接続）としてである。

「それに加えて」の「加えて」を描写しなければ「それに」が表層形式となる。一方、「それに」を描写しなければ「加えて」が表層形式となる。いずれの可能性もある。

C7.8 接続基8-2 [そうして]

C7-60> 彼女が1位になった。そうしてすべてが始まった。



図C7-48 彼女が1位になった。そうしてすべてが始まった。

「そうして」の「そう」は前件構造の代置実体である。「し S-」は古語の「ある」の意味の動詞とも、現代語の「する」の意味の動詞とも考えられる。

ここに接続の仲介構造が生じている。この例では「(事態が) そうあって」の意味として考えられる。

仲介構造「そうして」は後件構造「すべてが始まった」に対しては接続基4（「て」接続）としての関係にある。

C7.8 接続基8-3 [そして]

C7-61> 彼女が1位になった。そしてすべてが始まった。

図C7-48 の構造中の「そうして」の「そう soo」を短くして「そ so」にすれば「そして」になる。構造描写の際に「そう」を「そ」として描写すればよいわけで、構造は同一である。

C7.8 接続基8-4 [ではあるが] [だが]

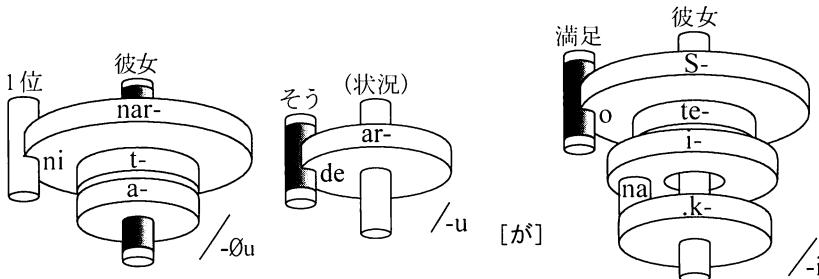
C7-62> 彼女は1位になった。ではあるが、満足はしていない。

C7-63> 彼女は1位になった。だが、満足はしていない。

「ではあるが」の構造を省力描写すると「だが」が生じる。この関係は次のとおりである。

C7-64> de-wa=ar-u=ga (ではあるが)
d -Ø = a -Ø=ga (だ が)

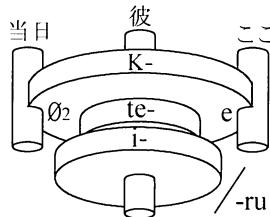
仲介接続構造と後件構造の接続関係は「が」(接続基3)の論流認識力である。



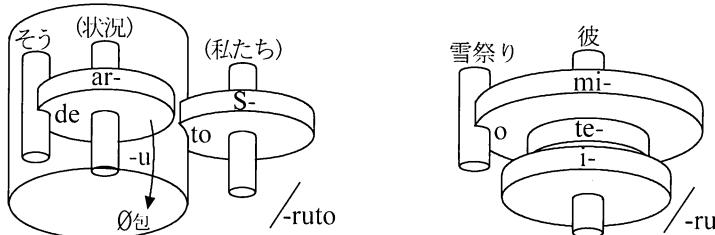
図C7-49 彼女は1位になった。ではあるが／だが、満足はしていない。

C7.8 接続基8-5 [だとすると]

C7-65> 話者A： 彼は当日ここへ来ている。

話者B： だとすると、雪祭りを見ている。

図C7-50 彼は当日ここへ来ている。



図C7-51 だとすると、彼は雪祭りを見ている。

「だとすると」の構造は「そうであるとすると」であり、これが独立仲介構造になっている。

C7-66> $\text{soo-de=ar-u=}\emptyset\text{包-to=s;ur-u=}\emptyset\text{包-to}$ (元来は $s;ur-u=\emptyset\text{包-to}$)
 $d=a-\emptyset=\emptyset\text{包-to=s;ur-u=to}$ (だとすると)

「そう」が前件構造の代置実体である。「する」は「仮定する」の意味として考えられる。主体は「私たち」である。仲介構造と後件構造の接続関係は接続基3の関係(元来は格関係)である。

◎「する」を $s;ur-u$ と分析することは『発展B』B8.4 ii), B5.1 参照。

C7.8 接続基8-6 [そうすると]

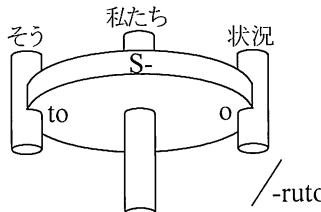
C7-67> 話者B： そうすると、雪祭りを見ている。

「そうすると」は接続基8-5「うだるとすると」(図C7-51)の構造を次のように

な省力描写をして得られたものと考えることができる。

- C7-68> soo-de=ar-u=θ包-to=s;ur-u=to (そうであるとすると)
 soo- θ= θ-θ=θ包-θ=s;ur-u=to (そう すると)

また、図C7-52 のような「状況をそうとする」構造の省力描写としても考えることができる。



図C7-52 そうすると

- C7-69> soo-to=s;ur-u=to (そうとすると)
 soo- θ=s;ur-u=to (そう すると)

C7.8 接続基8-7 [とすると]

接続基8-5 「だとすると」の「だ」を次のように省略して描写すれば「とすると」が得られる、

- C7-70> soo-de=ar-u=θ包-to=s;ur-u=to (そうであるとすると)
 d = a -θ=θ包-to=s;ur-u=to (だ とすると)
 θ = θ -θ=θ包-to=s;ur-u=to (とすると)

また、接続基8-6 「そう(と)すると」(図C7-52) 構造の省力描写をしても「とすると」が得られる。

- C7-71> soo-to=s;ur-u=to (そうとすると)
 θ -to=s;ur-u=to (とすると)

C7-72> 話者B : とすると, 雪祭りを見ている。

C7.8 接続基8-8 [すると]

「そうすると」(図C7-51) の構造において、次のような省力描写が行われると「すると」が生じる。

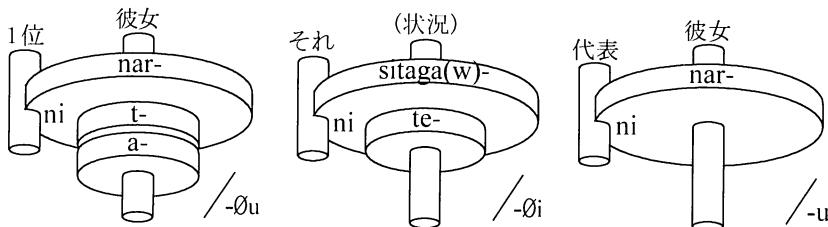
- C7-73> soo-de=ar-u=θ包-to=s;ur-u=to (そうであるとすると)
 θ - θ= θ-θ=θ包- θ=s;ur-u=to (とすると)

C7-74> 話者B : すると, 雪祭りを見ている。

C7.8 接続基8-9 [したがって]

C7-75> 彼女が1位になった。したがって、彼女が代表になる。

「したがって」の構造は、前件の内容に「従う」ことによって後件の内容が結論として生じることを意味する構造となる。前件を代置する「それ」が動属性「従う」の ni 格に置かれ、「従う」はテによる接続基となる。ここに「したがって」という独立仲介構造が形成される。



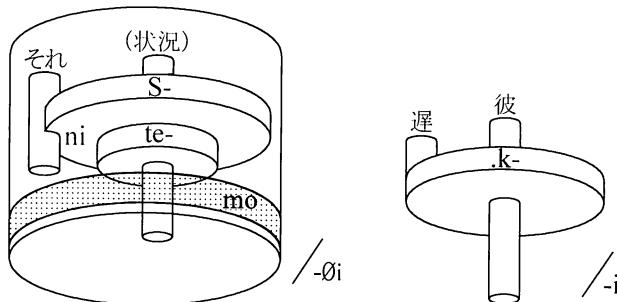
図C7-53 彼女が1位になった。したがって、彼女が代表になる。

独立仲介構造「したがって」と後件の接続は接続基4（「て」接続）の関係にある。

C7.8 接続基8-10 [それにしても]

C7-76> 話者A： 中央線は運行停止中です。

話者B： それにしても彼は遅い。



図C7-54 それにしても、彼は遅い。

「それにしても」の「し」の S- は「ある」の意味である。したがって、「それにしても」は「(状況が) そうあっても」という意味である。

「それにも」は仲介構造であるが、これが後件と関わるのは接続基4（「て」接続）の関係においてである。

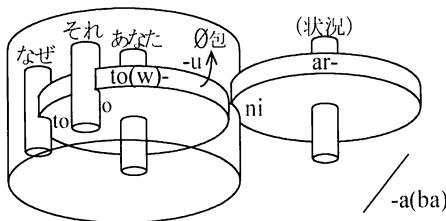
C7.8 接続基8-11 [なぜなら]

C7-77> 私は彼が好きです。 なぜなら、根性があるからです。

「なぜなら」の構造は図C7-55のような「あなたがそれをなぜと問うなら(ば)」のような構造と考えられる。これが省力描写されている。

C7-78> なぜ-to to(w)=u=θ包-ni ar-a(ba) (なぜと問うにあらば)
なぜ-θ θ -θ=θ包-n ar-a(ba) (なぜ な らば)

「なぜなら」も仲介構造である。これは接続基3として後件と関係している。ここにはこの仲介構造のみを示しておく。



図C7-55 なぜなら

C7.9 [接続基9] 独立構造並置4 …前件構造関連実体が後件構造の要素
「接続基9」では、両構造が独立並置されている状況において、前件構造との関連を示す実体が後件構造の構成要素として使用される。

C7.9 接続基9-1 [かつ]

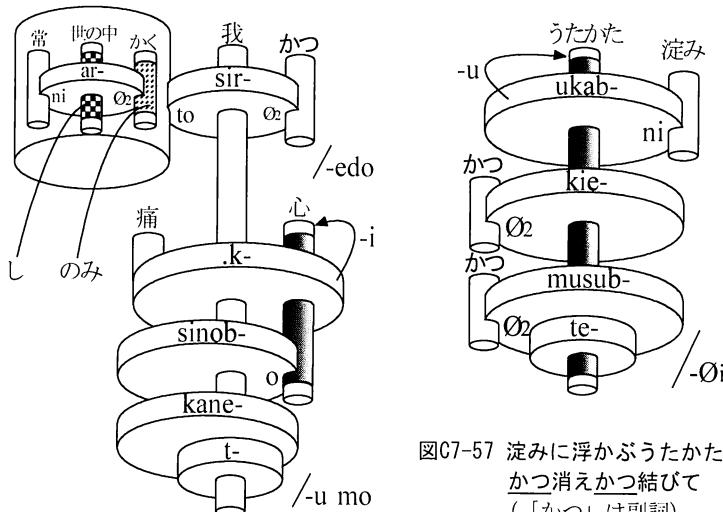
ここではまず古語での「かつ」の副詞としてのあり方を見て、次に現代語の接続基としてのあり方を見ることにする。

「かつ」は元来「ある動作・事態が存在する一方で他の動作・事態が存在することを表す」(『日本語文法大辞典』「かつ」の項)副詞として用いられていた。

C7-79> 世の中し常かくのみとかつ知れど痛き心は忍びかねつも
(万葉472)

この歌の意味は「世間はいつもこのようだと一方では知っているけれどついに気持ちはこらえられることよ」(『日本語文法大辞典』)である。

国語文法で「副詞」とされているものの多くは Ø2格にしか立たない実体である(『文法』2.7 Ø2格参照)。この「かつ」もその一つである。



図C7-57 淀みに浮かぶうたかたは、
かつ消えかつ結びて
(「かつ」は副詞)

C7-56 世の中し常かくのみとかつ知れど
痛き心は忍びかねつも (「かつ」は副詞)

歌の中の「し」は奈良時代から平安時代にかけて使われた強意の助詞であるが、ここでは現代語の「は」のような相対化描写詞(他実体排除)としてとらえておく。(現に『日本語文法大辞典』では「世の中は常かくのみと~」と引用している。) 「のみ」は「だけ」のような相対化描写詞(他実体排除)として扱っておく(『文法』3.1, 表5-6 参照)。

「かつ」はまた、次のように「かつAかつB」のかたちでも使用されていた。構造は図C7-57 に示すものとしてとらえられる。

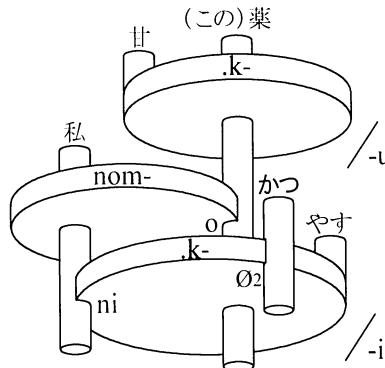
C7-80> 淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて (方丈記1)

元来このようなものであった「かつ」は、現代語としては次のように接続基となっている。構造上ではやはりØ2格に立っている。

C7-81> この薬は甘く、かつ飲みやすい。

この C7-81> の例では前件文の形容詞が連続描写(-u, 連用形)されたうえで使用されている。C7-82> のように、前件文が基本描写(-i)されることもある。

C7-82> この薬は甘い。かつ飲みやすい。



図C7-58 この薬は甘く、かつ飲みやすい

C7.9 接続基9-2 [また]

「また」は接続詞としてはある事態に、他の事態が添加・並列される関係にあることを示す。構造は接続基9-1 の「かつ」を「また」に置き換えた構造となる(図C7-58 参照)。

C7-83> この薬は甘く、また飲みやすい。

C7-84> この薬は甘い。また飲みやすい。

C7.10 【接続基10】 独立構造並置5 …前件構造不関連実体が後件構造要素

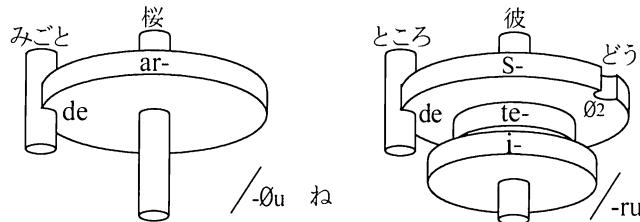
「接続基10」では独立構造が並置されている。前件構造と直接関わりのない実体が後件構造の構成体となる形のものであり、論流(つまり意味的に)は「話題転換」である。「ところで」「ときに」が使用される。会話の流れの中のある局面で、話者が前件と直接関係のない話題を持ち出したい欲求を生じたことを表現する接続基である。話者がその欲求の生じた局面にいることを、多様な話題の存在する空間内での位置として表現する場合に「ところで」を使用し、会話が線状的に進んでいる時間内での位置として表現する場合に「とき

に」を使用する。

意味の上で前件と後件に「関係がない」ということを積極的に示す点で他の接続基と異なっている。ここに特徴がある。

C7.10 接続基10-1 [ところで]

C7-85> 桜がみごとだね。ところで, 彼, どうしてる。



図C7-59 桜がみごとだね。ところで, 彼, どうしてる。

「どうしてる」の「どう」は「形式実体A」(「無属性実体」)であり、属性の盤にあいた穴(実体の欠如)としてモデル化する。(『文法』6.2)

C7.10 接続基10-2 [ときに]

C7-86> 桜がみごとだね。ときに, 彼, どうしてる。

構造は 図C7-59 の de 格にある「ところ」をはずし, 代わりに ni 格に「とき」を置いた構造となる。

以上、C 7章においては前件の後件に対する接続力がどのようなものであるのかについて考察した。

C 8 章

挨拶表現の構造

C8.0 「構造」理解のために

本章のねらいは2つある。まず、親しみのある挨拶表現の構造を示すことによって、日本語構造伝達文法のいう構造とはどんなものであるのかを理解する助けにしようということである。もう一つは、挨拶は慣用表現の一種であり、省略等が進んでおり、ともすれば文法的には破格の特別な表現と思わがちであるが、日本語である以上、日本語の原理によって構成されていることは間違いないことであり、それを構造伝達文法によって確認しようということである。

C8.1 扱う挨拶表現のリスト

- C8.2 おめでとうございます (形容属性)
- C8.3 いただきます (「V-ます」の構造)
- C8.4 ごちそうさまでした (~でした／~ました、 尊敬の構造)
- C8.5 ごめんください(ませ) (願いの表現)
- C8.6 お帰りなさい(ませ) (相手の行為を好意的に表す)
- C8.7 休ませていただきます (許可求めの意志表明)
- C8.8 こんにちは ／ さようなら (必ず省略する部分がある表現)
- C8.9 じゃあ、 また (意志関連表現)
- C8.10 めでたし ／ ありがたし (古語形容詞が現代語へ)
- C8.11 おわりに

C8.1 扱う挨拶表現のリスト

日本語構造伝達文法は現在のところ原理を見極めることに力を注いでいる段階であり、日本語の実際の一般的な文の構造を扱うことが少ない。そこで、本章では、数量的に限られた範囲内にあって扱いやすい挨拶的な慣用表現を取り上げ、構造を考えてみたい。

本章の特徴は、本書の他の部分と異なり、ある文法項目を中心に記述しているわけではないことにある。挨拶的な慣用表現を取り上げ、そこにどんな文法事項が働いているのかを記述するので、他の部分とはいわば逆の記述方式となっている。そこで、はじめに、どのような慣用表現がどこで扱われているのかを示しておいた方が読みやすくなるかと思われるので、挨拶表現の一覧を掲げておく。個々の表現に通し番号を付け、この番号の順に記述を進める。

- 1) 河原崎先生！ [呼びかけ]
- 2) おめでとうございます。／謹んで新年の…。／ありがとうございます。
- 3) おはようございます。／お暑うございます。
- 4) いただきます。
- 5) お邪魔します。／おいとまします。／失礼いたします。
- 6) 行ってきます。／行ってまいります。
- 7) よろしくお願いします。
- 8) ごちそうさま(です)。
- 9) ごちそうさま(でした)。／ただいま。
- 10) ようこそ。
- 11) ごめんください(ませ)。／お休みなさい(ませ)。
- 12) お許しください。／いらっしゃい。／行ってらっしゃい。
- 13) お帰りなさい(ませ)。
- 14) 休ませていただきます。／お休みさせてください。
- 15) こんにちは。／今晩は。
- 16) さようなら。／さらば。
- 17) じゃあ、また。／それでは。

C8.2 おめでとうございます

1) 呼びかけの構造

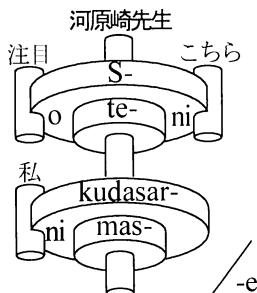
挨拶表現に先立って呼びかけが行われることがあるので、まず「呼びかけ」の構造から考えることにする。

C8-1> 河原崎先生！ 古希おめでとうございます^{*1}。

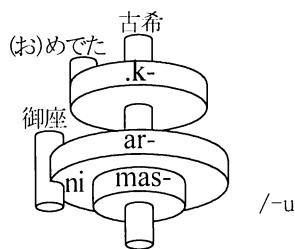
「河原崎先生！」の部分は呼びかけであり、「呼びかけられた河原崎先生は呼びかけている話者に注目してほしい」という話者の要請を表す表層形式である。これはたとえば、「河原崎先生のこちらに注目してください(mas-e)」(図C8-1)というような一つの構造が存在することを、構造の構成要素である「河原崎先生」という実体(名詞)のみを描写(ことば化)することによって示したものであり、一語文となっている。

2) 「おめでとうございます」の構造(形容属性)

「古希おめでとうございます」の部分の構造は図C8-2のようになってい る。この構造を音便・縮約等を反映させずに描写・表層化(ことば化)すれば、「古希がおめでたく御座(に)あります」となる。



図C8-1 河原崎先生！



図C8-2
古希おめでとうございます。
古希がおめでたく御座(に)あります。

この構造では「古希」が主体で、これが「(お)めでた.k-」という形容属性と「(御座-ni)ar-(i=mas-u)」という動属性を保持している。

*1 本章の内容は『河原崎幹夫先生古稀記念論文集』所収の「『古希おめでとうございます』の構造－慣用句の構造－」がもとにになっている。河原崎先生の快諾を得て若干の変更を加えた上で本章に収めた。

「めでた.k-」の部分の詳細な構造については C8. 10で述べることにするが、ここで扱う「めでた」は形容実体となっており、これが待遇描写詞「お」(『文法』表5-6)を伴って表層化される。この部分だけを表層化すれば「古希(が)(お)めでたい。」となる。「めでた.k-」の k- は、あとに形容属性の「基本描写詞 -i」(いわゆる「終止形」, C5. 10)が続く場合は発音されないので「めでた.k-i」は「めでたい」となる。(形容属性については C5. 10, 『文法』8. 1 参照。)

この部分に「(御座-ni)ar-(i=mas-)」の部分を続けて表層化する場合は「めでた.k-」の k- があとに形容属性の「他属性連続描写詞 -u」をとり、「めでた.k-u」(いわゆる「連用形」)となる。このとき「めでた.k-u」の k- も発音されず、「めでた u」となり、さらに「めでとう」と変化する。(「ございます」の構造が「(御座-ni)ar-(i=mas-u)」であることについては 11. 1⑤ 参照。)

「おめでとうございます」の「ございます」が省略されて「おめでとう」だけになることもある。その場合は「連用形」での文終止となる。

なお「(御座-ni)ar-(i=mas-u)」の -i が図C8-2上に示されていないが、これは -i が構造を描写する(表層化する)際に付加される描写詞(動属性の他属性連続描写詞 C6. 1)だからである。-u も描写詞ではあるが、基本描写詞(C5. 5)であるので 図C8-2 での「 /-u 」のように示しておくこともある。

めでたさのちなみ

C8-2> 新年あけましておめでとうございます。 (図C8-3)

の構造を図示すれば図C8-3となる。構造上部に「新年が ake-θ=mas-i=te-θ」の部分がある。下線部 θ, i, θ は他属性連続描写詞である。

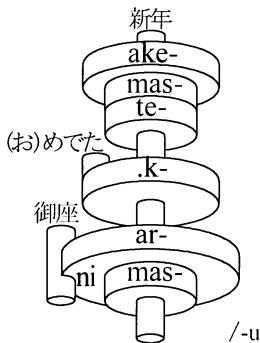
新年のもう一つの挨拶である次の文の構造は図C8-4のようになる。

C8-3> 謹んで新春のお慶びを申し上げます。 (図C8-4)

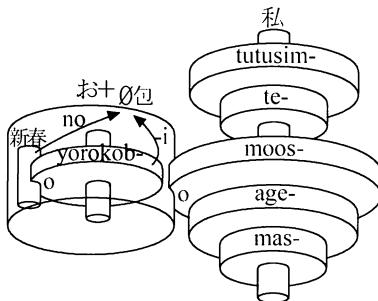
この文には「新春のお慶び」と「申し上げます」の部分がある。

「新春のお慶び」の構造は「新春を yorokob-」という構造が -i による第2修飾法(A16. 1)で実体修飾をし、ゼロ包含実体(6. 6)が成立し、これが表層化される際に待遇描写詞「お」を伴ったものである。

「申し上げます」の構造は moos- という動詞が待遇的方向を表す動詞 age-(39. 5) 及び丁寧化の助動詞 mas- (10. 2) を伴ったものである。



図C8-3 新年あけましておめでとうございます。

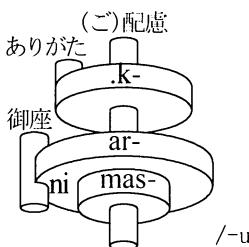


図C8-4 謹んで新春のお慶びを申し上げます。

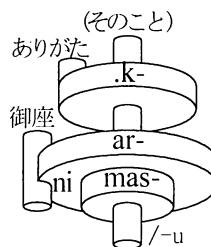
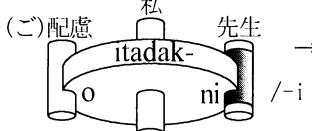
さて、河原崎先生にはいろいろご配慮いただくことがあり、そのつど

C8-4> ご配慮ありがとうございます。 (図C8-5)

との発話がなされるが、この文の構造は図C8-5のようになっている。図C8-2の「古希おめでとうございます」の構造と異なるのは「(ご)配慮があります」と「(ご)ありがとうございます」の部分である。この「ありがたい」の構造の詳細についてもC8.10で述べる。



図C8-5 図C8-6 先生にはご配慮(を)いただき、ありがとうございます。
ご配慮ありがとうございます。



また、感謝の同じ気持ちを次のような文で表現する場合もある。

C8-5> 先生にはご配慮(を)いただき、ありがとうございます。

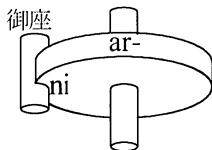
この場合の構造は図C8-6のような2つの構造の組み合わせとなり、表層化に際しては動属性(itadak-)の中止描写となり、中止描写詞-iが使用される。この描写詞も図上に「/-i」の形で示すことがある。

3) 「ございます」の構造表示

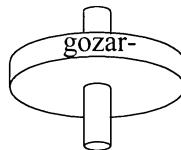
ところで、以上の構造図において「ございます」は「(御座-ni)ar-(i=mas-u)」であるものとして示してきたが、現代語話者の感覚では、そこまで構造に忠実な形式を考えなくとも、「ござる」という動詞があって、これに「ます」がついて丁寧化されたものとしてとらえても差し支えがなく、むしろそのほうが受け入れやすいだろう。

そこで、図C8-7の「御座(に)ある」が室町末期に「ござる」という形式を発生させた歴史的変化の結果を図C8-8のように示すことにする。

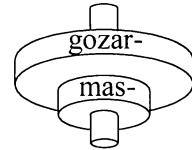
さらに、これに丁寧化の助動詞 mas- が付加された「ございます」の構造は図C8-9のように示すことになる。(gozar-i=mas- が goza-i=mas- に音便化される現象の説明については A3.8 を参照。) それで、たとえば、「お話がございます。」という文の構造は図C8-10のようになる。



図C8-7 御座(に)ある



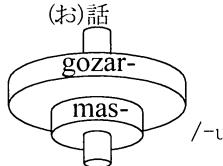
図C8-8 ござる



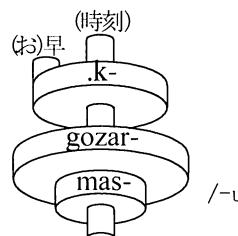
図C8-9 ございます

C8-6> おはようございます。 (図C8-11)

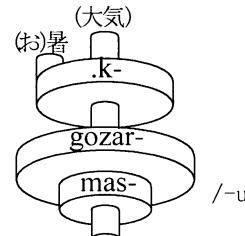
は図C8-11のような構造になる (o-haya.k-u gozar-i=mas-u)。このときの主体は「時刻」か「今」か「私たち」のようなものであろう。



図C8-10
お話がございます。



図C8-11
おはようございます。



図C8-12
お暑うございます。

C8-7> お暑うございます。 (図C8-12)

は図C8-11に似て、図C8-12のような構造になる。この場合の主体は「大気」か

「体感」か「私たち」のようなものであろう。「私たち」ならば「感覚主体」(20. 2)である。いずれにしても、普通は主語は何かについて考えることはない。

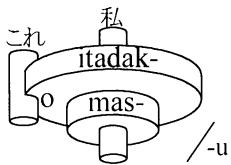
C8.3 いただきます（「V-ます」の構造）

4) を格実体(名詞)不描写の構造

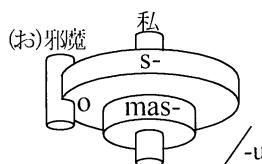
食事の際などに

C8-8> いただきます。 (図C8-13)

と言うが、これの構造は図C8-10の構造の gozar- という動詞を itadak- に換えたものになる。itadak- は他動詞なので、を格に置く実体を明示する必要があり、それが何かを考えなければならない。私たちは「何を」「いただきます」と言っているのだろうか。食事の場合であれば「ご飯」であるだろうか。ある場合には「いちご」であったり、「お金」であったり、「ハンカチ」であったりもする。それで、汎用性を考えて「これ」を使用することにすれば、図C8-13のようになる。



図C8-13 いただきます。



図C8-14 お邪魔します。

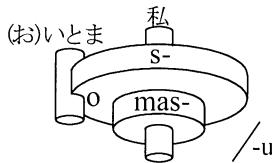
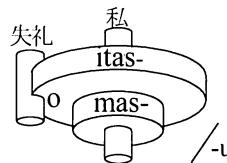
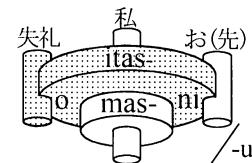
5) 併合現象

C8-9> お邪魔します。 (図C8-14)

も図C8-14のように図C8-13と似た形式になっているが、この場合は「(お)邪魔する (o-)zyama(-o)=s-」で一語の動詞のようにも感じられる。このように、ある実体(邪魔)が動詞(s-)のある格に置かれて、その構造を保ちながら、表層でみかけの一属性(邪魔する)として感じられるようになる現象を「併合」と呼ぶ(5.1注、A17.2⑫)。このとき「併合力」が働いている。これと同じことは C8-10> にもみられる。

C8-10> おいとまします。 o-itoma(-o)=s-i=mas-u (図C8-15)

(「いとま」は「挨拶をして別れること」)

図C8-15
おいとまします。図C8-16
失礼いたします。図C8-17
お先に失礼いたします。

次の C8-11> では、併合ではあっても 図C8-14, -15 のような「xx-(o)=s-」ではなく、動詞が謙譲の動詞 itas-をとって、「xx-(o)=itas-」になっている。

C8-11> 失礼いたします。 (図C8-16)

また、併合現象がありつつ、C8-12>のように「(お)先」のような別の実体が属性と格で関わっていることがある。

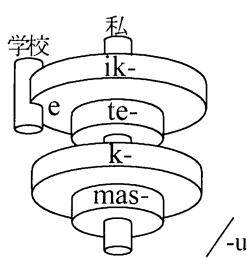
C8-12> お先に失礼いたします。 (図C8-17)

このとき、表層化(ことば化)に際して「失礼をお先にいたします」のように、併合表現の中にこの実体(お先)を割り込ませることはできない (A17.2⑫)。

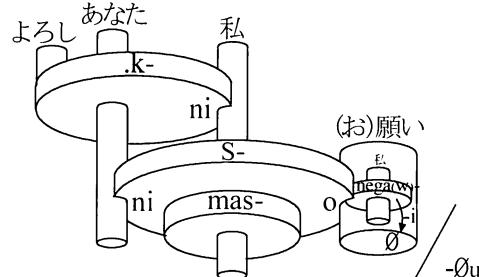
この併合現象を特に構造図上で示すときは、図C8-17 のように併合している部分を着色する。この着色によって一体性を表現する。

6) へ(に)格実体(名詞)不描写の構造

C8-13> 行ってきます。 (図C8-18)



図C8-18 (学校へ)行ってきます。



図C8-19 よろしくお願ひします。

「行ってきます」では「行って」の部分が上にある。(この部分、 ik-i=te-, が「行って」と発音される音便の現象については A3.5⑦ の説明を参照。) 動詞

k- の部分は mair- になることもある(「行ってまいります」)。挨拶としてのこの句では「学校へ(に)」のような「へ(に)格」にある行き先を表す名詞を言う必要はない。

7) 包含実体と動詞「s-」が併合する構造

C8-14> よろしくお願ひします。 (図C8-19)

C8-14>では nega(w)- という動詞が、無名の包含実体(\emptyset)の中に入り、第2修飾機能をもつ -(i) によりこの包含実体を修飾する形で実体(名詞)「nega(w)-i=θ包」(ねがい)を形成している。これは国語文法でいう連用形の名詞的用法に当たる。この包含実体「nega(w)-i=θ包」が動詞「s-」の「を格」に置かれ、ここに併合現象「お願ひする」が生じている。(第2修飾機能の -(i) は図中では矢印で示す。また、矢印にこの -(i) を添えることもある。ただし、矢印の表示は任意である。)

この構造の意味は「あなたが私によろしい」事態を「私があなたにお願いをします」ということである。「よろし.k-u」の -u は「他属性連續描写詞」(C5.5)である。

C8-15> よろしく。 (図C8-19)

だけで表層化することもある。このときの文はいわば「連用形終止」である。

なお、構造としては「あなたが私によろしい」事態だけでなく、「依頼の件がよろしい」事態など、別の形も考えられる。

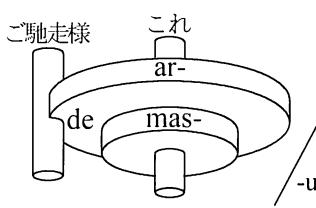
8) 「V(あり)-ます」が「です」で表層化される構造

私たちは何か食べ物を人からもらったときにこう言う。

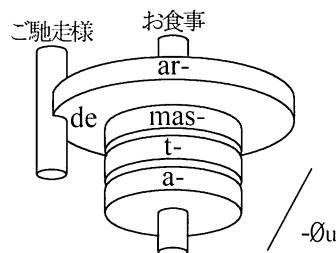
C8-16> ごちそうさま(です)。 (図C8-20)

この構造は 図C8-20 のように「これθ1ご馳走様であります。」であるが、慣用的に主語は言わず、「であります」も「です」で表層化する。(「です」が「であります」の構造をもつことについては 11.1 ④ 参照。)

「です」の部分を描写せずに「ごちそうさま」と言うこともある。その場合は実体(名詞)部分だけを表層化しているわけである。



図C8-20 ごちそうさま(です)。



図C8-21 ごちそうさま(でした)。

ちなみに、「ご馳走さま」の意味について考えておきたい。「馳走」は「走る」の意味なのに、なぜ「食事などを出して相手をもてなすこと。また、そのための料理。」の意味になるのか。また、なぜ「さま」が付くのか。

昔はおいしい料理を作るのは大変なことであった。今ならスーパーマーケットへ行けば、肉でも魚でも野菜でも、何でも一度ですぐ手に入る。しかし、昔はあちこち走り回らなければ多種類の食材は手に入らなかった。食材集めに、まさに大いに「馳走」をしたわけである。

一方、「さま」は「お疲れさま・ご苦労さま・お世話さま・ご愁傷さま・おあいにくさま・お待ちどおさま・お気の毒さま・ご面倒さま・お退屈さま・ご親切さま・お陰さま」のように、相手の労・不幸を表す名詞につけて、相手に対するいたわり、感謝の気持ちを表す語である。人の名前にも付ける。

それで、「ご馳走さま」という語は「おいしい料理を作るために走り回っていただいたことを感謝します。大変でしたね。」という気持ちを表現することになる。挨拶としてはこの原義を意識する必要はなく、手軽なインスタント食品が供された場合にも「ご馳走さま」と言って何ら差し支えはない。

C8.4 ごちそうさまでした（～でした／～ました、尊敬の構造）

9) 「～でした／～ました」の構造

食事が終わったときには完了基「た」 (=t-θ=a(r)- 10.5) を付けて、(直近過去)完了の形にして

C8-17> ごちそうさまでした。 (-de=θ-θ=s-i=t-θ=a-θu 10.5)

のように言う(図C8-21)。が、「でした」の部分を省略して「ごちそうさま」

とも言う。その場合は「です」を省略した C8-16>と同じ形になる。「ごちそうさま」は、挨拶としての簡略形を実現したことで、「です」「でした」のテレス表現部分を回避したことになり、相手から供されるものに関して、事前・事後のいずれにおいても言えることになる。

C8-18>は「～ました」の構造をもち、その部分は図C8-22のとおりである。

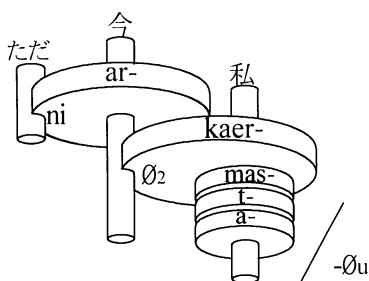
C8-18> ただいま(帰りました)。 (図C8-22)

(kaer-i=mas-i=t-θ=a-θu 10.2, 10.5)

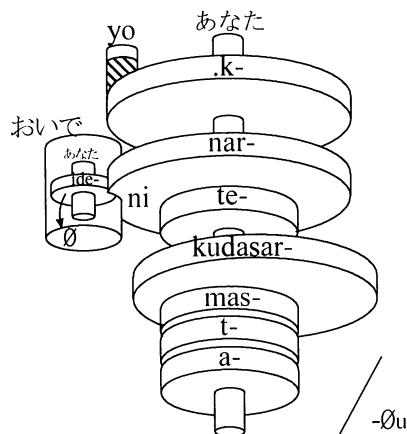
この慣用句での問題は「ただいま」をどう構造表示するかということにある。『岩波古語辞典』によれば「ただいま」は「他ならぬ今」であり、「ただ」は「生地のまま、加工のない意」である。そこで、構造では「今」の属性が話者(判断者)にとって「生地のままで加工のない」ものとして存在するものととらえ、「今θ1 ただに ar-」(ただに ar-u 今、ただなる今)構造として考えることにする。図C8-22 のようになる。

このとき「ただ」と「今」は同一構造を構成している実体どうしであり、これが結びついてみかけの一語「ただ今」を形成しているので、ここに「複合(第4修飾)」の現象が生じていることになる(A17.2⑯)。

「(ただ)今」が属性「帰る」に対して立つ格は「θ2格」である(2.7参照)。挨拶としてはこの「ただ今」だけを描写することが多い。



図C8-22 ただいま(帰りました)。



図C8-23 ようこそ[おいで(になって)くださいました]。

10) 尊敬の構造

C8-19> ようこそ [おいで(になって)くださいました]。 (図C8-23)

「ようこそ」は「yo.k-u koso」の k を発音しない音便形である(C8. 2 2))。 「こそ」は「相対化描写詞」であり、形容実体 yo に関わっている(3. 1)。この構造は図C8-23として考えられるが、yo.k- の主体が本当に「あなた」であるかどうかについては検討の余地がある。今のところはこうしておく。

「おいでになる」の部分は敬語表現である。「いで」は「出る」を意味する古語動詞「いづ id- / ide-」が第2修飾機能をもつ -(i) を -θ の形でとり、無名包含実体の中からこの実体を修飾して形成した実体(名詞)「ide-θ=θ包」である。実体であるので丁寧化の「お」を伴うことができる(「おいで」)。この実体が属性「なる」の「に格」に位置をとり、この形で尊敬を表している。

「ください mas-」の部分は「あなた」が話者に益・恩恵を与える表現である。これが「た」で(直近過去)完了になっている。

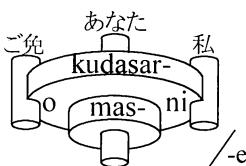
図C8-23の構造が表層化される場合には「になって」の部分が描写されなかったり、「ようこそ」だけが描写されたりすることが多い。

C8.5 ごめんください(ませ) (願いの表現)

11) 連用形での願い

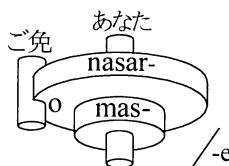
C8-20> ごめんください(ませ)。 (図C8-24)

の構造は図C8-24のようになっている。「御免」は「(相手からの)ゆるし」を意味しており、これを話者が聞き手に求めている。このことを命令の描写詞 -e を用いて表現している。



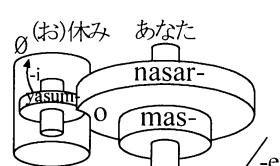
図C8-24

ご免ください(ませ)。



図C8-25

ご免なさい(ませ)。



図C8-26

お休みなさい(ませ)。

通常は「ませ」まで発話しない「ご免ください」との形も多く、あたかも「ください」という連用形が願いを表しているかのようになる。また、

C8-21> ご免なさい(ませ)。 (図C8-25)

C8-22> お休みなさい(ませ)。 (図C8-26)

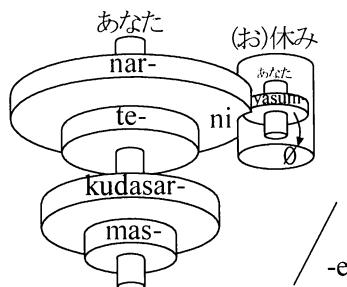
のように「～なさい(ませ)」の形もある。この構造でも「ませ」が表層化されなければ連用形での願いとなる。やはり、あたかも「ください」という連用形が願いを表しているかのような形になる。……現に表層文法(国語文法)では「くださる／なさる／おっしゃる／いらっしゃる」(尊敬4動詞)の「命令形」は「ください／なさい／おっしゃい／いらっしゃい」であるとしている。構造で考えれば「ください」等は命令形ではなく、あくまでも「連用形」である。なお、「ご免(ね)」「お休み」だけの表層化も行われる。

12) 尊敬構造での相手への願い

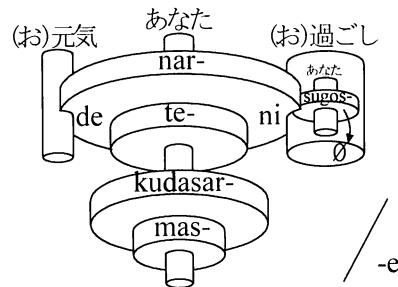
C8-23> お休み(になって)ください(ませ)。 (図C8-27)

C8-24> お許し(になって)ください(ませ)。 (図C8-27に準ずる)

のような場合は本章 10) で扱った尊敬構造になっている。



図C8-27
お休み(になって)ください(ませ)。



図C8-28
お元気で[お過ごしください(ませ)]。

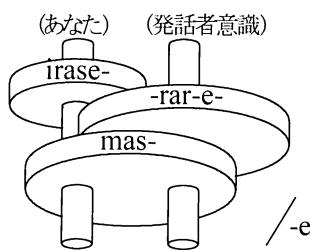
C8-25> お元気で[お過ごし(になって)ください(ませ)]。 (図C8-28)
の文も同様である。(「くださる」の構造は A3.8 参照。)

また、「いらっしゃる」も尊敬の構造をしている(『文法』12.7, A3.8)。

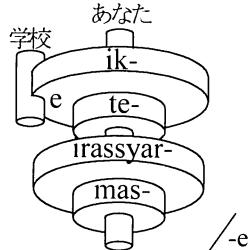
C8-26> いらっしゃい(ませ)。 (図C8-29)

「来週はこちらにいらっしゃいませ。」というような命令描写による発話がなされれば、それは相手への願い・勧誘である。「ませ」を省略すると、丁寧な部分 -mas- が外れ、いくぶん命令の気持ちが出る。しかし、客が自分の領域

に入ってきたときなどに C8-26>の発話がなされた場合、そのような気持ちはすぐではなく、単に相手の行為を好意的に描く表現になっている。



図C8-29 いらっしゃい(ませ)。



図C8-30 行ってらっしゃい(ませ)。

C8-27> 行って(い)らっしゃい(ませ)。 (図C8-30)

の構造では、命令の形を借りて、たぶん元来は相手に「ご無事で・行ってくる」ことを願っていたのだろうと考えられる。しかし、現在ではそのような願いの気持ちは薄れて、次節で扱うものに近くなっている。(図C8-30 では「いらっしゃいます」の部分の構造表示を簡略化してある。『文法』12.7)

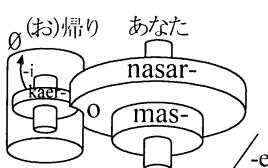
C8.6 お帰りなさい(ませ)

13) 願いの表現を用いて相手の行為を好意的に表す

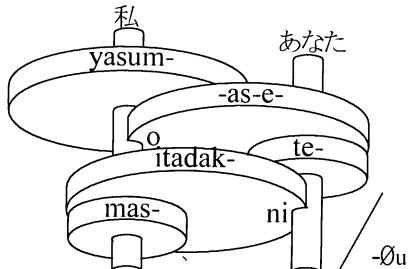
C8-28> お帰り[なさい(ませ)]。 (図C8-31)

C8-28>では形は命令描写(mas-e)であるが、C8.5で扱った「願い」の気持ちはすぐではなく、単に相手の行為を好意的に描く表現にすぎなくなっている。

「お帰りなさい」「お帰り」と短縮されることも多い。また、o-kaer-i=nasar-中の r-i-n の音列に r-V-n 変音(『文法』図37-33)が適用されて「おかえんなさい」となることもある。



図C8-31 お帰り[なさい(ませ)]。



図C8-32 休ませていただきます。

C8.7 休ませていただきます

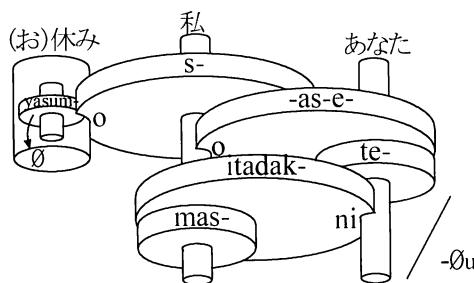
14) 許可を求める意志・願いの表明

C8-29> 休ませていただきます。 (図C8-32)

「休ませていただきます」の場合は、相手から「私を yasum-as-e-る」厚意を引き出そうという意志を話者がもっていることを表明している。(-as- は許可を表す原因態で、この例では -e- がついても同じ意味を保っている (B4.1))。許可を求める意志の表明である。

次も同様であるが、図C8-32の構造とは第1属性(B1.3)の形が異なっている。

C8-30> お休みさせていただきます。 (図C8-33)



図C8-33 お休みさせていただきます。

なお、構造図示は省略するが、

C8-31> 休ませてください。／ お休みさせてください。

のように、許可を求める意志の表明ではなく、許可を求める願いの表現もある。

「くださる」の主語は「あなた」である。

ちなみに、

C8-32> 休ませてちょうだい。／ お休みさせてちょうだい。

のように「頂戴する」を使う場合がある。「頂戴」は名詞であり、「頂戴する」で「ていただく」の意味の動詞となる。主語は受け手である。それで、この例のように「(相手の動作)てちょうだい」の場合は「ていただく」の意味になり、許可を求める意志の表明となる。

ただ、物品を受ける場合も含めて、「頂戴する」の「する」を外して「ちょうだい」だけの部分を使用するとき、「ください」と同じアクセント(中高型)で発音されることがあります、その場合には「ください」の気持ちで使用されてい

るものと考えられる。その場合、主語が「あなた」に変わるとすれば、「あなたが私に頂戴する」となって、おかしなことになるので、主語は変わっていないことになる。すると「私がくださる」という非論理的な表現をしていることになる。このような矛盾を抱えながらも「ちょうどい」は自然に使用されている。

刺客が「お命頂戴」(いただきます)というときと、子どもが「お菓子ちょうどい」(ください)というとき、アクセントは、前者が平板型、後者が中高型と異なっている。逆のアクセントで発話すると、前者では間が抜けた感じになり、後者では違和感が発生する。(ただし、後者では普通の中高型アクセントのとき、働きかけの気持ちのイントネーションがアクセントに影響を与えて、平板型アクセントに似たアクセントになることがある。) 興味深い。

C8.8 こんなちは／さようなら (必ず省略する部分がある表現)

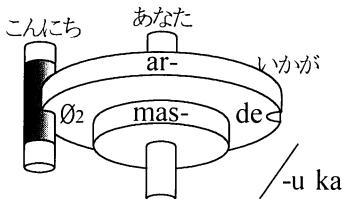
「こんなちは／さようなら」は構造を省略して表層化して得られる慣用句である。

15) 主題以外を省略する表現

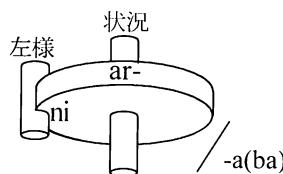
C8-33> こんなちは。 (図C8-34)

は、元来たとえば「こんなち(今日)はいかがですか。」(図C8-34)というような安否を問う挨拶であった。

「こんなちは」では主題語である「こんなち(は)」のみが表層化されていて、あとは省略されている。「コンチワ／ンチワ／チワ／チワース」等の表層化もある(「チワース」の「ス」は「デス」に由来するものと考えられる…「*コンチワーデス」)。安否を問う意識はすでにはない。「今晚は。」も同様である。
(疑問詞の構造図示については 6.2 参照)



図C8-34 こんなちは。



図C8-35 さようなら。

16) 条件節のみを表層化し、結果節を省略する表現

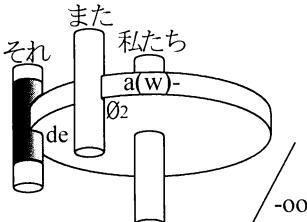
C8-34> さようなら。 sayoo-ni=ar-a(ba) (図C8-35)

の場合、「(状況が)左様にあらば(、おいとします)。」のような構造を考えられ、「そういうことなら(、またね)。」という気持ちの表現となっている。構造からは条件を表す部分のみが表層化され、帰結を表す部分は描写されない。

- i. ba が発音されずに「さようなら」 sayoo-n \emptyset =ar-a(\emptyset)
- o が発音されずに「さよなら」, sayo \emptyset -n \emptyset =ar-a(\emptyset)
- oo が発音されずに「さいなら」となったり, say \emptyset \emptyset -n \emptyset =ar-a(\emptyset)
- yoo-ni=a が発音されず、条件表示の「ば」が発音されて sa \emptyset \emptyset - \emptyset = \emptyset r-aba
「さらば」「おさらば」となったり, o-sa \emptyset \emptyset - \emptyset = \emptyset r-aba
さらに、終助詞「よ」を伴って「あばよ」 \emptyset \emptyset \emptyset \emptyset - \emptyset = \emptyset aba-yo
となったりすることもある。(「ば」の構造はA6章参照)

C8.9 じゃあ、また

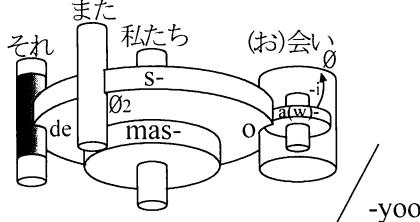
17) 意志関連表現



図C8-36

[(それ)では]また[(会おう)]。

C8-35> じゃあ、また。 (図C8-36)



図C8-37

それではまたお会いしましょう。

の場合は、「じゃあ」は「それでは」の縮約表層化されたものである。「ジャ／デワ／ソンジヤ／ソイジヤ／ンジヤ／ホンジヤ／ホイジヤ」も同様のものである。C8-35>では「会おう」も表層化されていない。

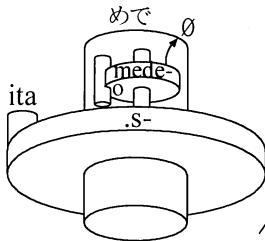
C8-36> それでは[また(お会いしましょう)]。 (図C8-37)

も同様の意味を伝えるが、「会う」が包含実体の中に入り実体化している。

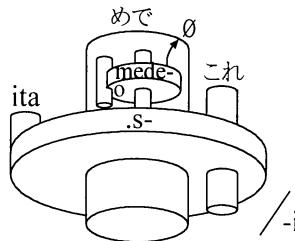
「会おう a(w)-oo」「会いましょう a(w)-i=mas-yoo」はともに「意志・推量描写詞 -(y)oo」を伴っている。ここでは意志の表明形式である。

C8.10 めでたし / ありがたし

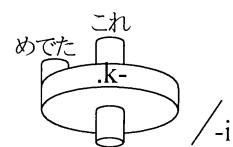
① めでたし



図C8-38 めでいたし



図C8-39 これθ1めでいたし



図C8-40 これθ1めでたい

「めでたし」については『全訳古語例解辞典』にこうある。

動詞「めづ」の連用形に、はなはだしい意の形容詞「いたし」が付いた「めでいたし」が変化した形

「めづ〔愛づ〕」は「美しさ、良さ、かわいらしさなどに強く心を打たれる」意である。「めで」は「連用形の名詞（実は第2修飾形+θ包）(9.2)」で、*mede-θ=θ包* となった実体(名詞)である。それで、「めでいたし」の構造を示せば図C8-38のようになる。図C8-39では「象θ1鼻が長い」のように、ある主体(象／これ)が単位構造(鼻が *naga.k-* / *mede-θ=θ包* が *ita.s-*)を属性とする構造(19.2)になっていることを示している。図C8-39の段階では「めで」が「属性主体」であり、「これ」が「本主体」である。

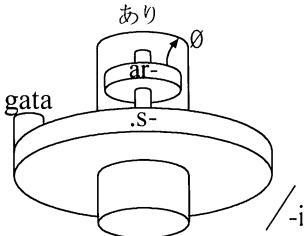
C8-37> *これθ1 *mede-θ=θ包* が *ita.s-* (*これθ1 めでがいたし)
 「めでいたし」が単位構造となっているが、これが音韻縮約による「めでたし・めでたい」形式を生じて表層で一語化した。このことを構造に反映させれば、図C8-40のような形容属性として示せることになる。

② ありがたし

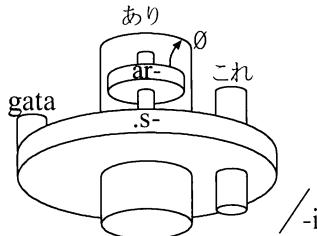
「ありがたし」については『全訳古語例解辞典』にこうある。

「有り」 + 「難し」で、有ることが難しい、がもとの意。めったにない、ということから、めったにないくらい優れている、の意になり、さらに変化して、現代語に通じる、感謝にたえない、の意になった。

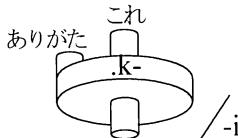
「有り」 + 「難し」の「有り」は動属性 ar- が包含実体中に入り名詞化したものです、「難し」は形容詞である。「有り」が主体で、これが「難し」を属性としている。この関係を構造図示すれば図C8-41のようになる。



図C8-41 あり01がたし



図C8-42 これ01あり01がたし



図C8-43 これ01ありがたい

別の主体「これ」が本主体となってこの単位構造を属性としてもち、図C8-42のような構造「これ01(は)[あり01がたし]」を生じる。「あり01がたし」の部分が一語化したことを見出せば図C8-43のような構造となる。……以上の一連の経緯は「めでたい」の場合と同様である。

改めて C8.2.2) を確認いただければ幸いである。

C8.11 おわりに

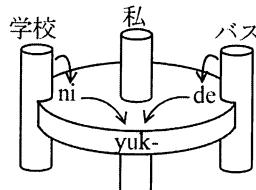
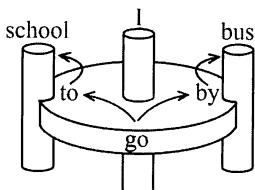
日本語構造伝達文法では形態素レベルの構造モデルを使用するために、表層文法では問題にならないようなことでも明確にしなければならないことがある。たとえば「おはよう」「こんにちは」「さようなら」の主体(主語)は何かなどと、ふつうは問うことはない。そこまで明確にする必要はあるのか、ないのか。それは研究者が何を求めるかに関わっている。求めるものが同じ方向にある研究者の参考となることができれば幸いである。

コラム5 英語は前置詞、日本語は後置詞

例として、英語と日本語の対応する単純な文を構造図と共に掲げる。

Cコ5-1) I go to school by bus. (図Cコ5-1)

Cコ5-2) 私は 学校に バスで 行く。 (図Cコ5-2)



図Cコ5-1 I go to school by bus. 図Cコ5-2 私は 学校に バスで 行く。

格(名詞と述語の論理関係)は、英語では“to”, “by”で表され、日本語では「ni に」, 「de で」で表されている。

格は名詞と動詞（この例での述語）の論理関係を表すものだから、
「名詞と動詞の間」に置かれる。英語の場合、動詞(go)は主語の後に、そして、主語以外の名詞より前に位置する。日本語の場合、動詞(行く)はすべての名詞より後の、文末に位置する。それで、「名詞と動詞の間」ということは、次の□の位置ということになる（図中の矢印参照）。

英 語 動詞 □ 名詞 (go to school)

日本語 名詞 □ 動詞 (学校 に 行く)

また、格を名詞との位置関係で表示すれば下線部のようになる。

英 語 動詞 □ 名詞 (go to school)

日本語 名詞 □ 動詞 (学校 に 行く)

つまり、英語では格表示形式(to)が名詞より前に置かれ、「前置詞」となり、日本語では格表示形式(に)が名詞より後に置かれ、「後置詞」となる。この原則は名詞の数が増えても変わらない(Cコ5-1, -2) 参照)。

格表示形式は、語順が SV-O, V-SO の言語では前置詞となり、SO-V の言語では後置詞となる傾向がある。上述の理由によるものと考えられる。(この3種類の語順が世界の全言語の90%を占めると言われている。)